

譚長真の生涯と思想

蜂屋邦夫

はじめに

一、譚長真の生涯

- (一) 病いを得て入信するまで
- (二) 重陽のもとの修行生活
- (三) さらなる修行と布教行脚
- (四) 譚長真の弟子たち

二、譚長真の思想

- (一) 門人への訓戒にみられる思想
- (二) 述懐や自詠にみられる思想
- (三) 道を詠んだものにみられる思想

小結

譚長真の生涯と思想

はじめに

全真教の開祖、王重陽（一一二二～一一七〇）は、後世「七真」と称されるようになった七人の弟子たちを入信させ、彼らを鍛えあげることによって教団の基礎を築いた。重陽の亡きあと、その基礎の上に教勢を確かなものにしたのは、七真のうちでも、とくに重陽門下の四哲といわれる馬丹陽（一一三三～一一八三）、譚長真（一一三三～一一八五）、劉長生（一一四七～一二〇三）、丘長春（一一四八～一二三七）の四人である。本稿は、そのうちの譚長真をとりあげ、その生涯と思想を一瞥するものである。

事実上の二代目教主である丹陽については、重陽に次いで資料が多く、その生平と思想を考察する材料にことかかない。⁽¹⁾しかし、丹陽と同年で、入信自体は丹陽より一步先じた長真については、その実力と後世への影響力を反映して、資料はまことに寥々たるものである。長真の詩詞文章は『水雲集』としてまとめられているが、所収の資料によって執筆の具体的状況を知りうるものは少ない。それゆえ、本稿の考察も、概略のものにすぎない。

本稿で使用したおもな資料は、つぎのようである。「」内は、本文中での略称である。

- 1 『水雲集』藏七九冊。一一八七年正月一五日付、東牟・州学正・范懌の序〔范序〕がついている。
- 2 『甘水仙源録』李道謙撰。藏六二一冊。一二八八年の序がある。これに、金源璫撰「長真子譚真人仙跡碑銘」〔仙跡碑〕が収められている。完顔璫は『金史』卷八五によれば、一二三二、三年ごろに病死しているが、碑文撰述は同

人の「終南山神仙重陽真人全真教祖碑」(『甘水仙源録』所収)とおなじころ、すなわち一二二〇年代後半のことであろう。

3 『金蓮正宗記』林間羽客樗櫟道人(秦志安)編。藏六冊。辛丑の年(一二四一年とされる)の序がある。本稿では、卷四「長真譚真人」伝を指す。〔金蓮〕

4 『七真年譜』李道謙撰。藏六冊。一二七一年の序がある。〔年譜〕

5 『金蓮正宗仙源像伝』劉天素・謝西瞻合撰。藏六冊。一三二六年および一三二七年の序がある。本稿では、「長真子」伝を指す。〔像伝〕

6 『歴世真仙体道通鑑統編』趙道一撰。藏四冊。本稿では、卷二「譚処端」伝を指す。〔統編〕

一、譚長真の生涯

(一) 病いを得て入信するまで

譚氏は、代々寧海に住む(金蓮、統編)大族であった(范序)。父親は金銀細工の職人であり、仕事ぶりは、量目をごまかすことなく、きっちりとしたものであったという(仙跡碑)。

長真は宣和五年(一二三三)三月一日の誕生で(年譜)、ことばのはっきりした子供であつたらしい(仙跡碑)。諸伝記資料によれば、長真は、六歳のとき、遊んでいて井戸に落ちた。家人が急いで降りてみると、平気な顔をして「水みづ

上」に坐っていた。助けあげてみると、ほとんど怪我もしていなかった、という。また、住居が火事になり、長真のベッドの前に棟木が落ちてくる状況になった。そのとき長真は熟睡していたが、呼びおこされると、べつだん驚きもしなかった、という。これらは、長真が「有道の士」であり、「水火の能く殞越する所に非ざる」ことを証するできごととされている（仙跡碑）のであるが、相当にのんびりした子供であつたに違いない。

学校に上つてからは、経典をよく憶え、学友たちのあいだで長真に匹敵するものは、あまりいなかったらしい。一〇歳で作詩を学んだが、あるとき、親しいものが木架の葡萄をさし示して詩を作らせたところ、「一朝 行き上る青竜の架、見者の人々 仰面して看る」と作つて、人々を感心させた（統編）。もっとも、この「葡萄篇」は、「仙跡碑」と『像伝』によれば、一五歳で学に志したときに詠み、人口に膾炙したものだ、という。

二〇歳で玉と名のつた（仙跡碑）。字を伯玉としたのも同時であろう。成長してからは、志を高くもつて衆人に同調せず、外見をてらうようなことはなかった（統編）というから、後年の、外面よりも内面を充実させようとする宗教人としての傾向は、もともと具わつていたと思われる。「范序」には、同年配で、おなじような志をもち、幼時には兒童の遊びを、長じては朋友の遊びをしたという范憚の觀察として、「生まれて穎悟、識度は凡ならず」、「人となりは剛正、操行ありて郷里これを敬憚す」ということがみえる。「金蓮」にも「人となり慷慨」、「はなはだ郷里に重んぜらる」とある。また、『金蓮』と『統編』には、「孝義」の点で称されたとあり、「操行」の内容の一端が知られるが、「義」の具体的内容は不明である。

学問の方面では、詩書、経史を涉洳し、草隸をたくみに書いた（仙跡碑、統編）。

以上が、諸伝記資料からみた長真の人となりである。中産階級出身でひととおりの学問もあり、自負心に富み、あ

まり妥協的でなく、郷里の人々から尊重、もしくは、けむたがられた人物、という人間像が浮かびあがってくる。具體的な行跡となるとまったく不明であり、わずかに『水雲集』卷上三a「述懷」に「従前は頑悪にて麤豪を驕おこしにし、今日は存心して孽とがの消ゆるを望む」(第二章第二節⑦参照)と言ひ、同・卷中三b「神光燦」詞に「譚哥昔日、家縁を瞻養し、孽を積むこと山丘の若き有り」と述べているのが、入信以前の生活を回顧したものである。だが、これらも概括的なもので、これらによって具体的なイメージが持てるわけではない。

入信のきっかけになったものは病氣である。あるとき、外出して酔っぱらい、帰り道で寝こんでしまったところ、雪に降られ、「風痺の疾」にかかってしまった(像伝)。このことについて『統編』には、酔っぱらって雪中に寝た、「仙跡碑」には、酔って雪に降られ、途中で寝た、となつてゐるが、『像伝』の書き方がもっとも自然であろう。

「風痺の疾」とは、まひの一種であるから、軽い脳出血でもあったのであろう。長真は、「玉たまのこれまでの行ないたるや、世の中に少しでも益するところがまっただくなかつたりえ、このごろまた奇疾にかかつてしまった。きつと薬石では治せないであろう(玉平昔為行、於世略無鮮益、中復遇奇疾、必非藥石可療之)」と考へ、ただ『北斗経』を暗誦して救いを求めた。すると、あるとき夢をみた。それは、大きな席が空中に横たわつており、長真が飛昇してそこに上ろうとすると、席には冠服をつけた北斗星君が坐つていた。長真は叩首して拝礼し、うっとりとしたところで眼がさめた、という夢であつた。このことがあつてから、奉道の心は篤くなった、という(仙跡碑)。

「風痺の疾」から夢の話までは『統編』にも略記されており、長真が夢にみたのは諸星君であつた、とある。だが、北斗星君とは北斗星を神格化したものであるから、七神つまり七元君がいるとされ、両資料はおなじことを言つてゐるのである。『北斗経』は、道藏中にも『太上玄靈北斗本命延生真経』、『太上玄靈北斗本命長生妙経』、『太上北斗二

十八章經』(いずれも三冊)などが収録されており、すべて延命と災厄・疾病などの解除をその内容としている。

「風痺の疾」にかかったのがいつのことであるのかは不明である。『水雲集』中にもそれを暗示するような表現はない。『金蓮』には、長真は、たまたま一一六七年の冬、風眩の病に苦しみ、多くの鍼薬を試みたが治らず、王重陽が終南からやって来て馬丹陽の家に居ることを聞いて、治療の法を求めに行った、とある。これによれば、発病から入信まで間なしのようであるが、これは『金蓮』だけに見える叙述である。他の資料によるかぎり、少なくとも発病は一一六七年のことではない。ただ、『北斗經』に救いを求める以前に、当然、多くの鍼薬を試みたことは事実である。

一一六七年の仲秋、重陽は寧海にやって来て、丹陽の宅の南園の地に全真庵を作らせて丹陽の教化にとりくんだ。この地方の有力者である丹陽が師事しているそうだが、という噂は、重陽にたいする評価を寧海一帯に高めたことである。九月には丘長春が崑崙山から全真庵にやって来て、弟子入りをした(年譜)。「仙跡碑」によれば、長真も重陽の噂を聞いてまっすぐに重陽のところへゆき、門弟の列に加えてくれるよう求めたのである。重陽は長真に頌を与え、すぐに庵中に泊めた。このとき重陽は、丹陽を入信させて出家させるべく、百日の期限をきって全真庵に籠り、丹陽相手に分裂十化の教化を試みている最中であつた。

ときに嚴冬の季節であり、夜になるといっそう寒い。炉にもかまどにも火はなく、海藻をしいて寝たが、寒さで指も落ちそうである。すると重陽は、つと足をのばして長真に抱かせた。しばらくすると身体中に汗をかき、こしきの中にいるように暖かくなった。明けがた、重陽は、自分が使ったあまり水で長真に顔を洗わせた。こうして一月あまりたつと、宿疾もとみによくつた(仙跡碑)。

『像伝』にも『統編』にも、簡略ながらもほぼ同様の記述がある。しかし、宿疾がとみによくなったのは、一夜明けたあくる朝、重陽が使ったあまり水で顔を洗ったときのこととされている。『金蓮』は、つぎのように、さらに創作めいている。

長真は杖にすがって重陽のところまでゆき、治療の法を求めたが、重陽は戸を閉めたまま中に入れない。長真は夕方ずっと頼みつけ、戸を叩きつけていた。すると、ふいに戸がひとりで開いた。重陽はたいへん喜び、仙縁があるとして長真を中に入れ、同衾して寝た。昔からの知りあいのように親密に話をし、明けがた起床したときには、旧疾はとみに愈え、四体は軽々として、飛ぶように走れるほどであった、と。いったい『金蓮』には荒唐な叙述が多いが、これもその一例であろう。

長真は、宿疾が軽減していくので、心から重陽を敬って仕えた(仙跡碑)。妻の嚴氏は長真が帰ってこないのを怪しみ、庵までやって来てそのわけを問いたしたが(統編)、長真は怒って離別してしまった(仙跡碑)。重陽はその勇断を嘉し(統編)、四字の秘訣を授け、さらに「達真譚玉」ということばを含む詞を贈り(像伝)、法名を処端、字を通正、号を長真子とつけた(金蓮)。贈った詩には「陰陽造化の関を超出し、一心に道に向って回還すること莫れ。清虚は本是れ真の仙路、只だ安居して内顔を養うを要す(超出陰陽造化関、一心向道莫回還、清虚本是真仙路、只要安居養内顔)」とある(金蓮)。こうして、一六七七年の冬、長真は重陽の弟子として出家した(年譜)。本稿では、これまですでに長真と称してきたが、そう呼べるのは、厳密に言えばむろんこの時以降のことである。

右のこのうち、「頌」と「四字の秘訣」については未詳である。「達真譚玉」とは、『重陽全真集』(以下『全真集』と略す。蔵七三三冊)卷四・八a(蘇幕遮)又寄与譚哥唐哥」に、つぎのようにみえる。

訓人人 休碌碌

人人に訓おしう 碌碌たるを休やすめよ

搜尋密妙長修福

密妙を搜尋して長く福を修め

慧慧明燈參性燭

慧慧たる明燈は性燭に參ず

謹謹營軀 食食牟平祿

謹謹として軀を營み 牟平の祿を食食す

拝風風 為叔叔

風風を拜し 叔叔と為す

兩兩姪賢 莫恣余相逐

兩兩の姪賢 余を恣いて相い逐う莫れ

切切依從新格曲

切切として新格の曲に依り従う

了了唐琳 達達真譚玉

了了たる唐琳 真に達達せる譚玉

意味をとりにくいが、世俗の生活を棄て、自分に従って「密妙」なる真の道を修めよ、と勧めたものであろう。牟平は寧海の県である。唐琳については未詳。譚玉と呼びかけている以上、この詞は長真の出家以前の作であり、譚と唐を並列しているのだから、全真庵には、一時期少なくとも長春と長真、唐琳の三人の弟子がいたことになる。³⁾『金蓮』にみえる贈詩は、字句に若干の異同があるが、『全真集』卷一〇・三aに「贈修行友」として収録されている。これも、出家する以前、長真が全真庵において重陽に従って修行していたときのもの、ということになる。

(二) 重陽のもとでの修行生活

譚長真は、前節で述べたように、一一六七年の冬、重陽の弟子として全真庵で出家した。すでに言及した資料から考えて、全真庵に赴いたときから出家まで、一月以上の日数を経過したと考えるほうが自然である。

出家後の長真の生活について、『金蓮』には、「既に師の訣を受け、人我を滅し、思慮を絶ち、青巾を戴き、紙布を穿る」とある。この叙述に重なるものとして、『全真集』巻九・三 a 「贈弟子頌」がある。これは四字句から成っており、前節で言及した「頌」と「四字の秘訣」とは、どちらもこの「頌」のことを指したものかもしれない。

「贈弟子頌」の内容はつぎのようである。

譚仙入道 慧刀能拳 譚仙は道に入り 慧刀を能く挙げ

棄妻割愛 捨了男女 妻を棄て愛を割き 男女を捨てさり了

却要隨余 余応便許 却つて余に随わんことを要め 余応に便ち許すべし

羨公決烈 羨公顯露 公の決烈を羨み 公の顯露を羨む

我吐真誠 却有少訴 我れ真誠を吐くも 却つて少しく訴えること有り

入道非難 亦非易做 道に入るは難きに非ず 亦た做し易きに非ず

苦中尋閑 閑中没苦 苦中に閑を尋ね 閑中に苦を没し

休覓嬰姪 莫搜竜虎 嬰姪を覓むるを休めよ 竜虎を搜す莫れ

只要真清 要識真趣 只だ真清を要め 真趣を識るを要め

絶尽人我 絶尽思慮 人我を絶ち尽くし 思慮を絶ち尽くせ

或饑或飽 或寒或暑 或いは饑え或いは飽き 或いは寒く或いは暑きに

便戴青巾 便衣紙布 便ち青巾を戴き 便ち紙布を衣る

決要上街 覓錢乞去 決かたず街かみに上ゆて 錢かねを覓もとめ乞もとし去ゆるを要す

些小絹帛 些小綿絮 些小の絹帛 些小の綿絮

遮藏微体 長令淡素 微体を遮藏し 長く淡素たんそなら令しめ

三人同行 三人同処 三人同行し 三人同処す

常用一心 不得二慕 常に一心いっしんを用もちかせ 二つながら慕ほうことを得ず

只是兄弟 並無師父 只だ是れ兄弟 並なに師父しふたること無し

惟談惟笑 共歌共舞 惟これ談だんじ惟これ笑わらい 共ともに歌うたい共ともに舞まい

落絶清閑 任詩任句 清閑せいげんに落絶らくてつし 詩うたに任まかせ句まがに任まかす

如在庖厨 大家管顧 如ごとし庖厨ほうちうに在あらば 大家みな管顧くわんし

不可独劳 也無独措 独ひとりり勞らうす可べからず 也また独ひとりり措はたらく無なかれ

自有金烏 自有玉兔 自おのずから金烏きんうあり 自おのずから玉兔ぎよくあり

認得真閑 長生門戸 真閑まげんを認まね得えれば 長生ちやうせいの門戸かど

意味不明な箇所がいくつかあり、右の読みは暫定的なものである。「羨公」は人名かもしれないが、どうもそうとりにくい。「三人云々」の句もあるが、長真の「贈瀋州王三校尉」の詩（『水雲集』卷上二b）にも、王三ひとりに贈つ

たものであるが「平等順和常大道、三人同上大神舟」とある。ただし、重陽の「頌」の「三人」は、「只是兄弟、並無師父」の表現からみて、重陽、長真、長春の三人かもしれない。

「入道」が「非難非易」だということについては、おなじような意味のものとして、『水雲集』卷上九b「繼胡子金先生韻」に「修行非易亦非難、薄外願真認内閑」とある。

「嬰姪竜虎」とは、『重陽真人授丹陽二十四訣』（藏本六冊、以下「二十四訣」と略す）によれば、「嬰兒」は「肝」、「姪女」は「肺」、「竜」は「神」、「虎」は「氣」である。これらは全真教で常用する専門語であるが、重陽は、初心者長真にむかっては、それらの理窟もしくは表現にくらまされることなく、「真清真趣」をこそ求めるべきだ、と教えたのであろう。同様の発想による表現は、『水雲集』卷上二九b「歌・其三落魄又」に「竜虎嬰姪総不能、黙黙醍醐常飲酌」、同・卷下四b「瑞鷓鴣」に「修行休覓虎竜兒、只要靈明識本機」とある。

「人我」とは、仏教的にいえば「我見（人我見、法我見）のひとつ、人には常に同一の主宰者が実体として存在すると認める偏見であるが、長真は、世俗世界における彼我对立の意識として理解したようである。たとえば『水雲集』卷上五b「頌・其二」に「是非絶尽方通妙、人我俱忘始悟玄」、同・卷中三a「贈王三校尉宅三姑姑」に「欲做俗中修鍊、先滅我人分弁」、同・卷下七b「望蓬萊」第四首に「全真妙、無我亦無人」、同・卷下八a「滿路花」に「是非人我、豈論与愚賢」などとあり、そのほかの用例をも含めて、すべて「人」と「我」とを字義通りに解釈していると言える。⁽⁴⁾

「青巾」と「紙布」とは、道士の質素な服装であり、長真の詩詞中にもしばしば対句として表現される常套句である。⁽⁵⁾

「金烏」と「玉兔」とは、「心中の液」と「腎中の氣」のことであろう。⁽⁶⁾

この「頌」で重陽が訓戒したことは、家族的恩愛などの世俗的感情を断ち、「閑」の境地に立つこと、道家の専門用語にふりまわされず、また、特殊な修行も避け、「真清真趣」を求めること、他人との対立意識を払拭し、世俗的思慮をなくすこと、どのような時節にも青巾と粗末な衣をつけ、街で寄捨を求めること、全真道士として共同の生活、共通の心情をもち、孤立した行動はとらないこと、などであろう。長真は、以後、道士としての生涯を通してこの訓戒をよく守ったと言える。

一一六八年二月八日に丹陽が出家し、王玉陽が牛仙山からやって来て弟子入りした。二月末に、重陽は、丹陽、長真、長春、玉陽をつれて崑崙山の石門口にゆき、そこに煙霞洞を開いた。三月には郝広寧が煙霞洞にやって来て出家した(年譜)。こうして、崑崙山中において、重陽は五人の弟子たちの育成に励んだのである。煙霞洞での共同生活について、『全真集』卷七・七 a「(漁家傲) 又崑崙山石門庵」に、

入得石門山上住 石門に入り得て山上に住す

弟兄手脚無安措 弟兄の手脚は安措すること無し

一日三時長厮覷 一日三時 厮の覷^{うかが}うを長くし

廚裏去 廚裏に去る

搬柴運水投鍋釜 柴^はを搬^はび水^を運^はび鍋釜^に投^ず

若勸同流疾作做 若し同流に疾作^もを做^すを勸^めるがごときは

心頭一点休教誤 心頭の一点 誤^{ちが}ひを教^えるを休^めよ

我待分明説一句　我れ分明を待ちて一句を説かん

従開悟　従りて開悟せよ

天機不敢輕彰露　天機は敢て軽がるしく彰露せず

とある。「廝」は炊事などの下働きをする者の意味であるが、「長廝觀」とは、よくわからない。この詞から、少なくとも、弟子たちの勤勞ぶりと、重陽の慎重な教導ぶりが看取できるであろう。

ところで、煙霞洞の生活には、さらに別の弟子たち（道士たち？）も加わっていたようである。丹陽の詞集『漸悟集』（藏天冊）の「踏雲行」（卷上b）の初首には「贈曹仙甘仙張仙同居煙霞洞」の詞書きがある。⁽⁶⁾

煙霞洞で修養するうち、丹陽は頭痛を病んで下山した。⁽⁷⁾ころあいを見はからって、重陽は「踏莎行」の詞「崑崙山団庵」（『全集集』卷七・三b）を作り、八月に、長真、長春、玉陽、広寧をつれて煙霞洞を出て文登県の姜夷の庵に遷り、そこに七宝会を立てた。丹陽が合流したのは一〇月になってからである。⁽⁸⁾

一一六九年の春、玉陽は重陽に別れて鉄查山にむかった。四月に、重陽は寧海の周伯通に要請され、丹陽、長真、長春、広寧をつれてその庵にゆき、そこを金蓮堂と名づけた。六月には、広寧も重陽に別れて鉄查山に行った。八月には金蓮会を立てた（年譜）。

この間、重陽は、よく弟子たちを乞食覓錢に駆りたてた。寧海では丹陽を誘い、伴哥（農村の若者）の身なりをして街で乞覓したが、その際、大幅の紙に詩を書いて背中につけた（『全集集』卷一・二b）。これを「紙旗」と呼び、それを詠んだ詩もいくつかある。その一つ「寧海乞化書紙旗上」（『全集集』卷二・二a）には「害風に人は問う何の恐る

ところの有るぞ、術法俱に無く総て能わず、毎日作為することは只だ此是のみ、上頭は飯を喫い下頭は登る(害風人間有何憑、術法俱無總不能、毎日作為只此是、上頭喫飯下頭登)」とある。「登」とは「登東」すなわち「上廁」の意味であろうか。いずれにせよ、表現上はまったくの自然的存在を述べており、禪僧の境涯に近いものを感じさせる。

また「紙旗上書」(『全真集』卷一〇・三a)には「風来を占め得て便ち縁有り、朝朝に贏し得て日高くして眠る、飢ゆる時は街上に來たりて求乞し、只だ人間の自ら錢を肯すを要む(占得風来便有縁、朝朝贏得日高眠、飢時街上来求乞、只要人間自肯錢)」とあるが、紙旗は乞見のためのものであるから、こうした文句があるのは当然であろう。「風」には、むろん「害風」すなわち重陽の意味も込められているに違いない。丹陽と長真に与えた「歲頭詩書紙旗引馬鈺諱処端教化」(『全真集』卷二・三a)には「(火)滅煙消去覓錢」とある。これも、おそらく寧海での生活の一齣であろう。九月に、重陽は丹陽、長真、長春をつれて寧海を出立し、登州にむかった。福山と蓬萊にそれぞれ三光会と玉華会を立てたあと、さらに西をめざした(年譜)。「金蓮」には、「大定戊子歲(一一六八)、親戚を辞し郷党に別れ、祖師の左右に従つて南のかた汴梁に遊ぶ」とある。寧海を後にしたのは一一六九年であるが、長真は他の三哲と違って、ふたたび故郷の地を踏むことはなかったのである。

途中、黄巢(登州)の盧山、延真觀に寄った。觀には盧真君(未詳)の「出世の迹」があり、長真は、玉皇殿の西壁に「杳杳として鸞輪 去りて廻らず、鸞を驂とし鶴を馭として雲堆を破る(杳杳鸞輪去不廻、鸞驂鶴馭破雲堆)」と題詩した。あるいは、自分の不退転の氣持を込めたのであろう。

九月中に萊州に着き、劉長生が弟子入りした。ここに四哲が揃ったわけである。「仙跡碑」に、長真の出家につづけて「師は公に命じて維陽に赴かせ、馬丘劉と同処せしむ」とあるのは、この辺での事情を指すと思われるが、「維

陽」についてはよくわからない。

重陽は、一〇月に掖県に平等会を立て、ついで四哲をつれて汴梁（開封）に至り、磁器王氏の旅邸に宿泊した（年譜）。それ以後、あくる一一七〇年正月四日に死ぬまで、四哲に対していわゆる重陽の酷教を続けた。死に臨んで、重陽は、「丹陽はすでに道を得、長真はすでに道を知っているから、わたしは何も心配していない。処機（長春）は学ぶところをすべて丹陽に聴け、処玄（長生）は長真が管領せよ」と遺命した（年譜）。ただ、長真は重陽から「知道」と認められはしたが、道士としての実力は「得道」の丹陽に遠く及ばなかったようである。

(三) さらになる修行と布教行脚

馬丹陽らは、王重陽の遺体を開封の孟宗猷の花圃に仮埋葬したあと、長安を経て劉蔣の祖庵に落ち着いた。祖庵を修治し、準備をととのえてから、四人は、一一七二年にふたたび開封に行き、重陽の仙柩を祖庵まで運んだ。「仙跡碑」には、劉蔣村の祖庵の西隅に瘞めた、とある。その後一一七四年の八月まで、四人はひたすら墓側で服喪し、師資の礼を尽くした。

重陽の亡きあと、長真がどのような修行をしていたか不明である。長真の詩詞には、丹陽らとの共同生活をうかがわせるものはほとんどなく、わずかに『水雲集』の「継丹陽師叔Y髻吟韻」（卷上三a）、「雲霧歛」（卷中二b）などが、それに相当するものであろう。しかし、前者は全真教に特有の定型句による紋切り型のもので、それによって長真の心情を推測することはむずかしい。後者は、

匿光輝 認愚鹵

光輝をかくし 愚鹵をぐる認む

兀兀騰騰 閑裏尋閑歩

兀兀騰騰 閑裏に閑歩を尋ぬ

垢面蓬頭衣繼纒

垢面蓬頭にして繼纒をま衣

乞食忘慚 方称煙霞侶

乞食して慚をは忘れ 方はじめて煙霞の侶と称す

絶驕矜 趣真素

驕矜を絶ち 真素に趣く

不受人欽 不挾貧卑処

人の欽うやみを受けず 貧卑の処を挾まばず

認正丹陽師父語

丹陽師父の語を認正す

了了惺惺 功満帰蓬路

了了惺惺 功満ちて蓬路に帰る

とあり、出家者としての意識と生活が看取できる。字句にまちがいがあれば丹陽を「師父」と呼んでいる点の特異である(輯要本も同じ)。教団の中心人物として丹陽を盛りたてていこうとする意識のあらわれであろう。

いっぽう、丹陽もまた、教勢の拡張に励みつつも、三人の兄弟弟子たちの結束と修行に心を配っていた。なんといつても教団の基礎固めは、彼らの修行の完成にかかっていたからである。『漸悟集』には「贈衆師兄」(巻上_三a)三首、「贈衆師兄」(巻下元a)一首、「四仙韻」(巻下_三a)四首などが収録され、個別に与えた詞も散見する。詩詞集『洞玄金玉集』(藏_七九六冊。以下『金玉集』と略す)にも「和譚仙韻」(巻二・_三a)二首、「示衆師兄」(巻七・_七a)、「勸衆師兄求乞残余」(巻七・_七a)二首、「勸衆師兄訪道」(巻八・_一b)、「寄譚劉丘三師兄鹿衣」(巻八・_八b)、「寄長真子」(巻九・_八a)、「寄譚劉郝三師友」(巻一〇・_一a)などがあり、長春や長生に個別に与えたものもある。

このうち「示衆師兄」には、「未だ至らざる丹陽、怎ぞ敢て師と為らん（未至丹陽、怎敢為師）」とあり、「勸衆師兄訪道」には、「馬風子、未だ玄に通ぜず。性は昏く識は昧く、儻然（明敏）ならず（馬風子、未通玄。性昏識昧不儻然）」とある。長真の「丹陽師父」の呼びかけに呼応した趣があるが、長真、長春、長生らが丹陽を自分たちの「師父」に推す動きがあったに違いない。しかし、強烈な印象を残した重陽「師父」のあとを継いで、三人に対して「師父」を名のることは、もちろん丹陽にできることではなかった。ただ、「主教」の地位にはついていたらしい。（補注1）

そこで、「勸衆師兄訪道」のつづきには、「仗に倚りて予は賢を枉了す。予が勧めを聴け、推延する莫れ。速かに当に我より離れて便ち參禅せよ。有道に就きて正せ（倚仗予枉了賢。聽予勸、莫推延。速當離我便參禪。就有道而正焉）」と、別箇の修行を勧めてもいるのである。これは、あるいは一一七四年八月に四人が別れたときの詞かもしれない。そのほかの贈詩詞は、おおむね修行を詠ったものである。

「寄譚劉郝三師友」には郝広寧も含まれている。広寧は一一七一年一〇月に入関して京兆府で乞食し、あくる年の九月に岐山に去った（年譜）。この間、当然、祖庭に立ち寄ったであろう。

一一七四年八月、服喪期間が関けて四哲は鄂県秦渡鎮の真武廟に出かけ、月の夜に共坐してそれぞれその志を述べた（年譜）。『甘水仙源録』巻九・俞応卯撰「鄂県秦渡鎮重修志道觀碑」には、このときのことについて、つぎのように記している。

服喪が終つて別れることになった。四宗師は、秦渡鎮真武堂に憩い、林の中を散策したが、重陽を慕う哀しみの気がまだ残っていた。手をとりあい、別れにのぞんで、それぞれが日ごろから心に懐いていた志を述べた。いずれも祖師の囑望にそむかぬものであった。長春は太公の磻溪に隠れ、長生は東周の灑水に寓し、長真は水南の朝元に

居り、ただ丹陽だけが帰って居所を造ることになった。それが現今の終南重陽万寿宮である。これより全真教はだんだんと盛んになり、師宗の徳もますます明らかとなった。興定の間（一一二七～三〇）に四真の事跡を景慕する者があり、真武堂に住んで宮室を維持し、香火の奉仕をした。恩例によって額が下賜され、志道観となった。⁽⁹⁾

このとき、長真は志として「闡是」と述べた（年譜）。『水雲集』などを通覧しても、長真の詩詞には重陽や丹陽の作品のような豊かなイメージは感じられず、おしなべて平凡である。長真は、自己のそうした非力を宗教人としての線の細さとして自覚し、そのことを「是」すなわち理窟で理解しようとする、と把握したのではあるまいか。

なお、丹陽の詞に「真武宮道士索」（『漸悟集』卷上三a）があるので、このとき、むろん真武宮の道士とも交渉があったことが知られる。また、丹陽の「四仙韻」の一首（『漸悟集』卷下三b）には「丘仙通密、隠跡磻溪、人不識。通妙劉仙、永住終南、屏万縁。譚仙通正、志在清貧、修大定。三髻山侗、願処環墻、也放慵」とある。これもこのときのもものと思われるが、長生はすぐに洛陽に出かけたわけではないらしい。

長真は、丹陽らに別れてから、「跡を伊洛の間にくらし、神を調え気を練り、宿を紅衢紫陌花林酒陳の間に託しても心は土木のごとく全然動かすことなく、万両の黄金にも全然腰を折らず、因循漂泊して」洛陽に行った（金蓮）。『金蓮』の叙述は観念的で定型的なものであるが、しかし長真の日常はこれに近いものであったらうと思われる。

かくて長真は、ひとまず朗然子の練丹の地とされる洛水南部の朝元宮に止住した（金蓮、続編）。

朗然子とは『歴世真仙体道通鑑』（蔵三冊）卷五〇・四bに伝のある劉希岳のことである。伝によれば、希岳は、字は秀峰、漳州の人である。若いころは儒者であったが、宋の太宗の端拱中（九八八～八九）に道士となり、洛陽の老子観に居住した。六四歳ではじめて「異人」にあつて道を得、朗然子と号した。あるとき、衆に別れを告げ、沐浴し

て衣をかえ、室に席をしいて横になった。しばらくすると、布団の中で音がして一匹の金蟬が飛び出して来て、そのまま秀峰の所在がわからなくなった。その詩三十余篇が世に行なわれている、と。⁽¹⁰⁾

詩とは『太玄朗然子進道詩』(藏三冊)三〇首である。その端拱戊子歲(九八八)季冬の自序によれば、住趾は洛京の通玄觀である。跋には、端拱年間に桃花坊で白日昇天した、觀は勅を賜って集真觀と改名した、とある。とすれば、希岳が道士として在世したのは、ほんの二年ほどであり、進道詩は最晩年のもの、ということになる。自序や詩の内容から考えると、希岳は外丹と内丹とともに修めた道士らしい。

『水雲集』の冒頭は「題洛陽朝元宮」という七言律詩である。これは、すべて七言律詩で書かれている進道詩に会わせたものである。内容上は、とりたてて言うほどのことはない。

「仙跡碑」には、劉蔣村での服喪の記事につづけて、そのころ長真齋を請う者があり、長真は寒冷をもともせず、溪を涉^{わた}っていった。水は脚にまつわりつくが、いっこうに平気なので、人びとはみな驚嘆した、ということが記されている。これは服喪中のことは考えられないから、洛陽滞在以後のことであろう。獲嘉(衛州の県)止住の前に記されているから、この年の冬のことと考えられるが、碑の記述がそれほど正確であるかどうかはわからない。

長真は、一一七四年中に、洛陽から黄河に沿って東北にむかい、修武(懷州の県)、獲嘉、新郷(衛州の県)、衛州に至った。修武では、狂人のような愚者のような張八哥なる者が、ある日、市において「来られた譚先生は神仙の總管だ(来者譚先生、神仙之總管也)」と唱えた、という(統編)。『水雲集』卷中三aには「贈修武賈信実」という詞があり、入道した賈氏に修道の心得を説いている。当然、長真は、各地で布教しながら行脚したのである。

修武から獲嘉を経て新郷の府君廟の新庵に滞在した。ここでは、つぎのような妙な話が伝わっている。

ある日、長真は庵を閉鎖して、「衛州へ行く」と言ってお出かけた。夕方になって、廟官の温生なる者が庵中に火の光が輝いているのを見つけた。そこで窓の隙間からのぞくと、長真が火のそばに坐っていた。温生は驚き怪しんでこっそり立ち去り、夜の明けぬ前に、だまって人を衛州にやって、長真から薬をもらってくるようにさせた。その人が衛州にゆくと、長真はまだ布団の中にいた。薬をもらって帰ってきたので、また庵の中をのぞいてみると、火はまだ全部燃えつきてはいなかった(仙跡碑)。

この話は『像伝』と『統編』にもみえる。『像伝』の記事は、廟官の名は温六、衛州に人をやつて長真を探させたところ、長真は州の北関の旅邸に泊っていた、というものである。『統編』では、温六は長真を認めると拜をしたが、長真はちょっと答えただけで、黙って出ていった。温六がしばらく待っていても戻ってこない。探してみたが、どこへ行ったかわからない。そこで急いで道衆を呼んでこの次第を告げた。すると道衆は、朱四なる者を衛州に行かせて訊ねさせた。宿の主人が言うことには、「先生は、おいでになつてから全然外には出ていません」と。朱が戻つてそのことを衆に告げると、みなは、はじめて温六の見た長真は陽神であった、とわかった、という話になっている。

大同小異の話であるが、要するに、長真出立の後にはいり込んだ別の道士を廟官が長真と誤認したものに違いない。「陽神」とは、重陽や丹陽の伝記にもよく見える分身のことである。

一一七五年には、長真は磁州二祖鎮で乞食した(年譜、像伝、統編)。二祖鎮は衛州(汲県)からほぼ北の方向に一四〇キロほどのところにある。ここでの話として、『像伝』につきのようなことが見える。たまたま、ある酔っぱらいが、長真にむかって「お前はどこから来た」と問い、長真が答えもしないうちに、いきなり拳固で口を殴りつけた。長真は、歯が折れ、血が流れたが、顔色はますます穏やかで、折れた歯を吐き出して手に握り、歌い踊つて帰った。

見ていた街の人たちは、みな怒り、役所に訴えよ、と勧めたが、長真は、「彼は酔っていただけだ」と言った。丹陽は関中であつてこのことを聞き、長真を讃えて、「一拳に消し尽くす平生の業」と言った、と。

『統編』では、長真は一狂徒に殴られて宿に帰つたが、宿の人たちに訴訟を勧められて、「他の慈悲の教誨を謝す」と言つた、とある。『像伝』のさりげなさに比べて創作臭が強い。『金蓮』では、さらに作爲的な話となつてゐる。長真は、あるとき乞食して寺に至り、禪師に余りものを乞うた。すると禪師はたいへん怒つて拳固で殴りつけ、齒を二本折つてしまつた。長真は血といっしょに腹中に飲みこんでしまつた。そばにいた人たちが禪師にくつてかかろうとすると、長真は笑つて稽首し、まるで心を動かさない。このことから長真の名は京洛中に広まつた、と。むろん、禪僧の粗暴と長真の温厚を単純に対比させたものにすぎず、また、どうやら洛陽での出来事としてゐるようである。

ただ、全真道士たちが、こうした乱暴な目に会うことは珍しいことではなかつたらしい。『丹陽真人語録』（藏書元冊、二b）にも、丹陽がはじめて関中に行つて乞化したとき、酒肆で酔つぱらいに殴られた、とある。丹陽は弟子たちにも、そうした目に会つたことがあるかどうか訊ね、弟子たちが無いと答えると、「よしよし。もしそうした目に会つても、争つてはならぬ（好尙。遇着、勿諍）」と戒めてゐる。

一一七六年、長真は磁州からさらに東北にむかい、洛州の白家灘に至つた（年譜、像伝、統編）。白家灘は曲周県の鎮である。『像伝』と『統編』には、そこでのこととして、つぎのような話が記載されている。

一農夫が病氣にかかり、何ヵ月にもなるが、どんな治療でも治らない。するとある夜、たいへん立派な身体つききの道士が紅葉（芍薬のことか。次章第三節②に「紅芍薬」の語がある）をくれたので、それを服した、という夢を見た。眼がさめると、病氣は治つていた。あくる日、長真を見てひどく驚き、「この方は夢の中で薬を下さつた師だ」と言い、

お札をしようとしたが、長真は受けとらないで去った、と。「仙跡碑」では、これは長真の「神」を示すこととされている。

一一七七年には、高唐（博州の県）を行化した（年譜、続編）。白家灘からほぼ一〇〇キロほど東であろうか。さらに七五キロほど東にゆけば濟南府に着く。ただ、長真は山東に帰ろうとしたわけではないらしい。記録によるかぎり、長真の布教行脚は高唐が最東端である。

一一七八年八月に京兆府を出て西北地方を教化した丹陽に対して、長真は河南府から東北方面の教化を担当したことになる。丹陽らは、山東には、当時まだ重陽の創立した五会が活動していると考えていたであろうから、布教への取りくみ方について役割分担を相談したのではないか、と思われる。

『続編』によれば、高唐の茶肆の呉六なる者が旅の道侶をたいへん親切に接待するので、長真は「亀蛇」の二字を書いてその店に懸けた。ある日、隣りが火事になり、多くの家に延焼したが、呉の店だけは焼けなかった。そこで人びとは、この二字を純陽真人の「辟火符」と同じだとした、とある。

呂純陽の辟火符とは、純陽が博興（高唐から一八〇キロほど東）の酒館に残したもので、県城に大火があったとき、その酒館には及ばなかった、という話が伝わっていた（続編）。民間では、道士にはこうした力があると信じられていたわけであるが、長真の行跡の記録としては、旧来の道士と変わらない点も多い。

長真は、高唐あたりから引き返したらしい。『水雲集』巻中六には「寄長生劉師兄」の詞が見えるが、それには、「一別して倏忽に三年（一別倏忽三年）、……自ら塵縁の未だ断たざるを愧じ、磁洛兩郡に在りて、且く恁く隨縁す（自愧塵縁未断、在磁洛兩郡、且恁隨縁）」とある。これによるかぎり、一一七七年には、長真は磁洛兩州にいたこと

になる。これ以後、大定二〇年（一一八〇）に至るまでの所在は分明でない。ただ、注11で触れたように、『年譜』によると一一七九年には衛州獲嘉県の府君廟に居住した、とある。新郷か獲嘉かは別として、長真はそのあたりを往復しているので、一一七九年に府君廟に起居していたとしても矛盾はない。『水雲集』には潯州の王三校尉や王四郎に贈った詩詞があり、また『水雲集』自体も潯州で鏤板印行されたものである（范序）から、そのあたりにも比較的長期滞在したことと思われる。そこで、『水雲集』にみえる地名も参照して、一一七七年から八〇年にかけて、長真は、洺州↓磁州↓相州↓潯州（淇門鎮）↓衛州（汲県、宜村、新郷、獲嘉）↓開封府（陽武）と行脚したと推定しておこう。ただし、潯州、衛州、陽武の間は、何度か往復したものと思われる。

この間、長真は宜村で乞食した（統篇）。宜村は、『金史』地理志・中によれば、水害をさけて貞祐二、三年（一一二四、五）にここに城つくって州治を移しているから、汲県近辺の村であろう。ここで長真は、新造船の進水にぶつかり、なかなか進水できないでいるのを手助けして簡単に進水させた、という（統編）。

それから東のかた陽武県に行ったとき、⁽¹³⁾ 県の北方に、夜、北斗が車輪のように大きな星に変わっているのが見えた。急いで道衆を呼んでいっしょに見た。その星はまだ鶏卵ほどの大きさがあり、動いていたが、しばらくすると、またいつもの星空にもどった。このことがあってから、長真はたいへん謹んで聖号をとなえるようになった。衛州（じつは潯州の衛県）の淇門鎮の石孔目なる者が、長真にそのわけを訊ねると、長真は「皆もまた念ずるべきである。今年は、きつと大水があるだろう」と言った。しかし、人びとは誰もそのことに注意を払わなかった。この年、黄河は王洪埽で決壊した（統編）。

王洪埽（王洪埽）は、衛州（汲県）と淇門鎮の中間地点にある。『金史』五行志によれば、長真の布教期間に関係す

る大水は、大定一七年（一一七七）と二〇年（一一八〇）の二回である。ただ、一七年のものは「七月、大雨、濔沱、盧溝水溢、河決白溝」とあり、濔沱と盧溝は衛州や濬州よりはるか北方であり、黄河とも関係ない。白溝は衛州や濬州よりずっと下流である。ところが二〇年については「秋、河決衛州」とあり、まさに「統編」の「河決王洪埽」の記事とびったり一致する。長真は、一一七九年から八〇年にかけて、獲嘉↓汲県（宜村）↓（陽武？）↓淇門鎮と行脚したことになる。

衛州、濬州での長真の布教について一言言及しておこう。まず、「贈獲嘉王法師」〔『水雲集』卷中七b〕は、

譚風偏喜王三父

譚風は偏ひとよに喜ぶ王三父

夙世良縁

夙世の良縁を

休更推延

更に推延することを休やめよ

妻悪兒嫌出世

妻は悪にくみ兒は嫌きらう出世やしまのこのこ

修行外用無為作

修行の外は無為むゐを用もちて作なせ

囚馬擒猿

馬を囚とらえ猿さるを擒とらえ

不返家園

家園に返かへらずんば

定做逍遙物外仙

定きまとな逍遙物外の仙と做なる

と、自己の修養の立場をはっきりさせ、法師に全真教への入信を勧めたものと思われるが、出家であるはずの法師自

身の信仰との関係は不分明である。「王三父」とは王重陽を指す場合が多いが、ここでは王法師のことであろう。「馬」は「意」、「猿」は「心」の意味である(二十四訣)。「贈瀋州王三校尉」(同・卷上三_b、同・卷中八_b、同・卷下二_b、同・卷下七_a)は、いずれも出家をためらって迷っている王三校尉を全真教に入信させようとして詠んだものである。「水雲集」中、王三校尉に贈った詩詞がもっとも多く、「贈王三校尉宅三姑姑」(同・卷中三_a)のように家人に贈った詞もある。また、「寄瀋州道友王四郎」(同・卷中三_b)、「贈瀋州王四郎」(同・卷下七_b)もあり、後者の「賢兄来到説公深淺」の表現からみれば、王四郎はおそらく王三校尉の弟であろう。

「道友」という表現によれば、王四郎は道教信徒である。ところで、民間では、長真入信の動機がすでにそうであったように、道士の能力の一つとして病気を治療することが期待されていた。⁽¹⁵⁾ それには、薬の調合、投与ということも含まれていた。王四郎は道士とは言えないが、道士に近い存在として、薬の心得もあったらしい。「統編」によれば、あるとき、長真と王四郎はいっしょに「寸金丸」という薬を造った。ところが、長真の与えた薬は効き目のないものはないのに、王四郎が与えた薬は一〇に四、五しか効き目がない。そこで、薬を交換して効き目をためしてみたところ、やはり前とおなじ結果になった。そこで始めて、長真の場合は、薬の効き目ばかりでなく、「道気法力」のあらたかな働きもあるのだとわかった、という。いずれにせよ、瀋州は、長真の布教の足跡がもっとも色濃く残っている地域である。

瀋州、衛州のあたりで、長真が、人びとから薬を求められたのは事実であった。「水雲集」卷上二_aには「在淇門鎮為衆人每日求藥因此作」の詩がみえる。ただ、内容は、薬という「智術」にたよるよりも、「無為守一で靈珠を養え」とする道教的なものである。医者ならぬ道士としては当然の言明であろう。

一一八〇年、長真は西のかた同州に遊び、西里庵に居住した(年譜、統編)。また潼関を越えて陝西盆地の一角に來たわけである。このころ、門人や信徒が親筆を求めると、つねに「龜蛇」の二字を書いて与えた。字は力強く、「竜蛇盤屈の状」があったという(統編)。「統編」には、つづけて、これは乙巳の歳(一一八五)の四月一日に仙脱することをあらかじめ示したものだ、とあるが、こじつけである。

一一八一年には、長真は同州から南下し、渭水を渡って華陰県にゆき、その純陽洞に止住した(年譜、像伝、統編)。ところが、そのうち、首に瘡ができ、「そろそろ死ぬ時期だ(其將死乎)」と言った。みな、何と答えてよいかわからないでいると、しばらくして、「わたしは、今はまだ死なぬ。いのちが十分になったならば死ぬであろう(今我未死。速生於足、則死矣)」と言った。そこで、皆に詩を示してその境涯を述べた(統編)。「統編」にみえる詩は、『水雲集』巻上二七aに収録されている(次章第三節⑩参照)。「水雲集」には、また「遊華山」(巻上二〇b)や、「太華山陰」に住む「穆老仙」に贈った「贈穆先生」(巻上二七b、巻中二a)があるが、それらもこのころの作であろう。

長真が華陰にどのくらい滞在したかは不明である。「像伝」と『統編』には、純陽洞での記事につづけて、また洛陽にゆき、朝元宮の東に數畝の空地を得てそこに庵を築いて居住した、とある。「仙跡碑」には、長真は、かねてから、中国の中心に位置し多くの人がとが道心をもっているということで洛陽を慕っており、そこで丹を完成させたいと願っていた、とある。死期を自覚した以上、洛陽に急いだかもしれない。「仙跡碑」には、つづけて、長真は朗然子の故居である洛南の朝元宮を見て、山水が美しく遺跡がまだ残っているのが気に入った、とある。これは、「仙跡碑」が朝元宮についてここで始めて言及したから書かれたことであり、事実上は一一七四年当時についての記事であろう。

「仙跡碑」には、さらにつきのようである。当時、道士の張永寿なる者が觀の業務を主管していた。宮の東がわの空地数畝を長真に与え、茅を切り払い、礫を取りのぞいて庵をつくった。また、洛陽の人で朱氏なる者が道を奉じており、庵を構えて長真に請うて住んでもらった、と。『水雲集』巻中八には「贈福昌縣趙殿試」という詞があるが、これもおそらくそのころのもので、長真は一時期、福昌（嵩州の泉）の東の韓城鎮にも止住した。⁽¹⁸⁾

朱庵に起居して「神遊」している間に、重陽と丹陽に会って仙期を知らされたらしく、また朝元宮の故居に帰った（仙跡碑）。一一八三年二月二日に丹陽が逝去したという報せは、長真のもとにも届いていたのである。^(補注と)

『終南山祖庭仙真内伝』（李道謙撰、藏六冊）巻下「洞真真人」伝によると、于善慶（一一六六―一二五〇）は、隴州竜門山で長春に侍していたが、一一八五年の春、命じられて洛陽に行き、長春の手紙を長真に渡した。長真は、善慶に「強を摧き鋭を挫き、塵心を鍛錬することが学道の要点だ」と教えた。ほどなく長真が返真したので、善慶は葬祭の礼が終了してからまた入闕した、とある。于善慶は長真最晩年の黨陶をうけたことになる。「摧強挫鋭」は長真が好んで使う句の一つである。

一一八五年四月一日のこと、長真は門人に戒げて、「重陽師真とわたしは蓬萊で会う約束がある。いま、そこに趣こう（重陽師真与我有蓬萊之約。今将往矣）」と言って、あらかじめ葬事を営ませ、それから長短句を書きつけ、書き終ると（像伝、続編）、頭を東にして南がわをむき、肘を枕にして逝去した（金蓮）。この逝去の姿勢は丹陽の場合とおなじである。ときに長真六三歳であった。これは巳年の巳月の巳時で、むかし「龜蛇」を画いたのは帰真を予知したものだ、と「仙跡碑」にも書いてある。ちなみに、四月一日は甲寅であるから、神秘化も考えものである。

辞世の詞とは、つぎのようものである。

交泰一声雷
こもごも泰^つず一声の雷

迸出靈光万道輝
靈光を迸出し万道輝く

竜遇迅雷重脱殻
竜は迅雷に遇い重ねて殻を脱す

幽微
幽微なるかな

射出金光透頂飛
金光を射出して頂を透かして飛ぶ

一性赴瑤池
一性瑤池に赴き

得与丹陽相從隨
丹陽と相い從隨するを得ん

顯現長真真妙理
顯現す長真の真妙の理

無為
無為なるかな

湧出陽神独自帰
陽神を湧出して独り自ら帰る

雷は、丹陽の逝去のときにも鳴ったことになっている。長真の場合は、ことばに表わしただけであるが、竜と化して昇天する道士につきものの表現かもしれない。丹陽の場合、伝記としては雷のほかにもいろいろな舞台装置が工夫されていたが、長真の場合は、五色の祥雲が庭のぐるりを取りまき、青鸞白鶴が空高く舞い飛び（金蓮）、異香が数日間部屋にたちこめた（仙跡碑、像伝）という紋切り型である。『続編』には、そうした叙述さえ無い。そのほうが却って長真にふさわしい臨終の場面であろう。

「仙跡碑」によれば、朝元宮は、のちに長春の命名によって棲霞觀と改名された。ただ、『像伝』には、いまの寧海の棲霞觀が長真の故居であり、洛南の朝元宮が登真の所だ、とある。觀名については、さらに検討の必要がある。

四 譚長真の弟子たち

長真の弟子たちのうち、姓名の判明している者はきわめて少ない。「仙跡碑」によれば、王道明と董尚志は、子供のころから長真に仕えて「負汲香火の勤」を尽くし、長真が逝去してから数十年間墓側に起居した。王道明は朝元宮の長真故居の觀事を管轄し、董尚志と常に醮祭をおこたらず行なった、という。彼ら兩名が、いづらか行跡がわかる例外的な弟子である。

濬州の全真庵主である王琉輝らは、長真の「道を暢ひらげし物を接つう詩詞」(年譜)集である『水雲集』を鏤板印行して四方に広く伝えた(范序)。これは長真在世中のことと思われる。濬州は前節で述べたように長真の布教の行跡が比較的残っている地域である。王琉輝らも当然長真の弟子であったと思われる。

濬州は、その後一一八六年に大水に見舞われ、『水雲集』の板木も散佚して無くなってしまった。掖県(萊州)に居た劉長生はそのことを残念に思い、門人の徐守道、李道微、于悟仙らを寧海に派遣し、范懌に序を求め、再版を出した(范序)。一一八六年の大水とは、『金史』五行志に「秋、河決、壞衛州城」と見えるものである。

『水雲集』中には門人に与えた詩文もあるが、姓名は伝わらない。わずかに「安然子」(卷上三)の号が見えるだけである。この点では、精力的に弟子を養成した丹陽とは対照的である。

王志明は、韓城鎮の長真の旧跡に庵をたて、そこを長真庵と名づけて住んだ。「その徒」とあるから、やはり長真

の弟子であろう。若年のころ、最晩年の長真に仕えたと思われる⁽²⁰⁾。

目下のところ、長真の弟子として判明している者は、以上の数名にすぎない。

二、譚長真の思想

(一) 門人への訓戒にみられる思想

譚長真の思想を検討する場合に資料となるものは、やはり『水雲集』しかない。しかし、そこに収録された一〇〇首に満たない詩詞から長真の思想を体系的に抽出することは至難である。詩詞は、思想を直接表現したものというより、入信や出家の勧誘、あるいは悟道体験を情感的に表出したものだからである。散文体のものは、卷上三b~三aに収録された三〇〇字ほどの「示門人語録」しかない。そこで、本稿では、むしろ詩詞が作成された情況に着目し、まず、門人あるいは長真の話を聴く信者たちに与えたものから検討することにしよう。その場合、内容に即して分類することも困難であるから、便宜的に、『水雲集』収録の順に従って見てゆくことにする。

① 「贈門人安然子等」卷上三b

風子微言啓衆曹 風子は微言して衆曹を啓く

等閑休把氣神勞 等閑にして氣神を勞することを休めよ

欲求海底成多宝

海底に多宝を成すを求めんと欲さば

須鍊山頭絶一毫

須らく山頭に鍊って一毫を絶つべし

心逐有情傷氣火

心有情を逐えば氣火を傷り

意遊攀愛害神刀

意攀愛に遊べば神刀を害す

願公早悟虚華境

願わくは公の早く虚華の境を悟り

免向人間再一遭

人間に再び一遭するを免れんことを

これは、有情や攀愛という世俗的感情を超越して、「氣神」を安定させることを言っている。全真教では、「神」は「性」、「氣」は「命」のこと、「性」は精神活動、「命」は身体的な活動全般を指すと思われる。「氣火」とは、その身体内のもろもろの活動を「火」にたとえ、「神刀」とは、精神の統括、集中作用を「刀」にたとえたものであろう。

② 「示門人」卷上六b、八b、第一首

出得俗家入道家

俗家を出で得て道家に入り

恰如平地步煙霞

恰かも平地の如く煙霞を歩む

塵寰物裏光陰短

塵寰物裏に光陰は短かく

仙境壺中日月賒

仙境壺中に日月は賒し

落魄水雲真活計

落魄水雲の真活計

虚無清静善生涯

虚無清静の善生涯

常觀無愆人情遠

常に無愆を觀れば人情の遠く

不覺爐中結大砂 覺おぼえず爐中に大砂を結ぶを

これは出家の長所と目標を述べている。「歩煙霞」や「爐中結大砂」は修養完成の定型句で、長真はとくに「歩煙霞」の表現を好んだ。「落魄」も「水雲」も道士の心境で、「水雲」はつまり「雲水」と同じである。「常観無慾」は、むろん『道德経』一章を踏まえている。

③ 「示門人」第二首

守一真持認内閑 守一し真持して内閑を認め

精勤苦行鍊心端 精勤し苦行して心端を鍊る

玄元有路非容易 玄元に路有り容易に非ず

方寸無塵也不難 方寸に塵無し也た難からず

十二時中常覺察 十二時中 常に覺察し

三千功裏莫欺謾 三千の功裏に欺謾する莫れ

前程如覓無来去 前程を如し覓むれば来去する無く

深作無人無我観 深く無人無我観を作せ

これは、やや具体的に修業の心得を説いている。すなわち、十二時中、欺謾の心を持つことなく、気持をふらふらさせずに集中して鍛錬せよ、と言う。「無人無我観」は前章二節に説明したものであるが、この詩においても、自己意識を实体化することを打破する思想というより、一、二句の表現から見れば、「内閑」なる真実の自己を把持するために、人と我を対立させる俗情を克服するという方向の思想であろう。

④ 「示門人」第三首

摧彊控銳做修行 彊を摧き銳を控き修行を做し

滅我降心断世情 我を滅し心を降し世情を断つ

黙黙琢磨除俊弁 黙黙として琢磨し俊弁を除き

昏昏鍛鍊去猩猩 昏昏として鍛鍊し猩猩を去る

無明起処真靈暗 無明の起ころ処 真靈暗く

柔弱生時道眼明 柔弱の生ずる時 道眼明らけし

每与無明經鬪戰 毎に無明と鬪戦を経て

一廻忍は一廻贏 一廻忍べば一廻贏つ

これは修行時における心のありようを述べている。それは、要するに俗情を超越することであるが、具体的には、自我を滅し、さかしらな口弁や粗暴な気持を斥けることと考えられる。「摧彊控銳」は長真の常套句である。「柔弱」とならんで『道徳経』を踏まえたものであるが、むしろ道士の常套語と考えてよいであろう。「降心」とは、『重陽立教十五論』（藏苑元冊）第八に論じられているが、ここでは「滅我」と同様の意味であろう。「猩猩」とは「猿」が「心」であるとされることから言えば、猛々しい心、鬪争心、を指すのであろう。

⑤ 「示門人」第四首

滅惡除情作善良 惡を滅し情を除き善良と作り

好将名利両俱忘 好く名と利を両つながら俱に忘る

山頭潑殺無明火 山頭 潑殺す無明の火

靈室常添般若香 靈室 常に添う般若の香

塵垢尽除明鏡現 塵垢 尽く除いて明鏡現われ

荒蕪如去玉蓮芳 荒蕪 如し去らば玉蓮芳し

修行莫厭華胥遠 修行して厭う莫れ華胥の遠きを

了了虚空路不長 虚空を了了れば路長からず

これは、心から俗情と名利を払拭することを述べている。「山頭」は①にも見える長真の常套句であるが、「靈室」とともに、意識・思考の働く場所を表現したものとと思われる。両者は、つまり頭であり胸であろう。本来の心は明鏡や玉蓮のようなものであるが、それが俗情によって暗まされる、と考える点は、元來は仏教の考え方であろうが、「無明」や「般若」などの表現も含めて、長真にはこれらを仏教だとする意識は稀薄であったと思われる。重陽の教えに従って長真も三教一致の立場を守っており、仏教的表現もまた全真教の一部分として取りこまれていたからである。

⑥ 「示門人」第五首

修行須要認靈源 修行は須らく靈源を認むるを要むべく

認出靈源一点鮮 靈源を認出すれば一点鮮かなり

情慾永除超法界 情慾を永く除いて法界を超え

癡嗔滅尽離人天 癡嗔を滅し尽くして人天を離る

休生顛倒食諸有 顛倒を生じ諸有を食るを休め

莫起塵心染衆緣 塵心を起こし衆縁に染むる莫れ

空寂性中無罣碍 空寂の性中に罣碍無く

自然閑裏產胎仙 自然の閑裏に胎仙を産む

これは、修行の最肝要な点を述べている。「靈源」や「一点」は道士の常套句で、身中の生命の中心点、いわゆる丹田の精氣とでも言うべきものであろう。「靈源」の觀念だけから言えば、それは身中にあり、限りなく主体的なものであるから客観的には把握し得ない。それゆえ法界（理法が貫徹しているものとして捉えられる客観世界）や人天（人間世界と天上世界）に拘泥するかぎり「靈源」は把握できない、ということになる。しかし、長真が言っていることは、もう少し具体的、実践的である。すなわち、情慾や癡嗔という世俗世界での普通の感情を棄て、空寂にして自然の境涯に入れ、ということであろう。「胎仙」は仙人の名前であるが、⁽²¹⁾「靈源」を仙人化して表現したものであろう。

⑦ 「示門人」第六首

虚堂默默熱心香 虚堂に默默として心香を熱す

便是吾門真道場 便是れ吾門の真道場

走入虚空尋自在 虚空に走入し自在を尋ね

撥除煩惱覓清涼 煩惱を撥除して清涼を覓む

象憑离坎安爐竈 象は离坎に憑りて爐竈を安んじ

卦按周天鍊白黄 卦は周天に按じて白黄を鍊る

永永綿綿依此做 永永綿綿として此に依りて做し

功成九転結鉛霜 功は九転を成して鉛霜を結ぶ

これは、古くからある道教の用語を全真教でも使用している例であり、これらの用語によって修養のありさまを述べているのである。「离坎」すなわち「坎離」は、「精血」、「水火」、「性命」などを指す⁽²²⁾。要するに、身体内の「氣」の活動において、対立し融合する二要素と考えてよいであろう。「爐竈」とは、いわゆる丹田中で陽の中心たる「心氣」と陰の中心たる「腎氣」が結合する場所を指す⁽²³⁾。「周天」は身体内をそれらの「氣」がめぐることを経験したものである⁽²⁴⁾。「白黄⁽²⁵⁾」は、「白金」と「黄芽⁽²⁶⁾」であるよりも、「白雪」と「黄芽⁽²⁷⁾」であろうが、いずれにせよ体内をめぐる「氣」のことであろう。「九転」とは大丹の完成、すなわち修養が完成することの常套句であり、「鉛霜」もその象徴的な表現である。「鉛」は通常「鉛汞」というように「汞」と対にして言われ、「鉛汞」は、やはり「心」と「腎」を意味する。「霜」は冬のものであるから「冬」や「水」、つまり「汞」や「腎」の方向に解される。右のように、この詩は内丹の用語によって「養氣」を説明しており、重陽や丹陽の教説ともむろん一致するものである。

⑧ 「示門人」第七首

修行休向法中求 修行は法中に求める休れ

著法尋求不自由 法に著いて尋求するは自由ならず

認取自家心是仏 自家の心の仏なるを認取せよ

何須向外苦週遊 何ぞ外に向って苦しんで週遊するを須いんや

靈源慧照塵休昧 靈源の慧もて塵を照らして昧なるを休め

応物般般意莫留 物に応じて般般に意を留める莫れ

両道清風開玉戸 両道の清風 玉戸を開き

一条銀燵出山頭 一条の銀燵 山頭に出ず

これは、心を外界にむけることなく、自己の中なる「靈源」を求めよ、と述べている。「両道」とは陰陽の道路、つまり体内の「氣」の通路のことであろう。「清風」も「玉戸」も全真教の常套句で、『全真集』卷一・二四a「修行」第二首に「清風裏面全真氣」、同・卷一・三a「述懷」初首に「五重玉戸光生彩」とある。「玉戸」とは体内にあるさまざまな「関」の「戸」であろう。「銀燵」は「清風」と対にして言われる「明月」の光のことだと思われるが、不詳である。

⑨ 「勸衆修持」卷上三三b

聴我洗心方 我が洗心の方を聴かば

儵然滋味長 儵然ゆづんとして滋味長ず

無無中妙用 無無の中に妙用あり

有有内含光 有有の内に光を含む

人被慾情染 人 慾情に染めらるれば

情生神氣傷 情生じて神氣かま傷る

人還情慾断 人 還かえって情慾を断たば

歩歩履仙郷 歩歩に仙郷を履かむ

これは、長真の話を聴きに集まった聴衆にむかって述べたものであろう。弟子たちに与えたものより判りやすい。

ここでは、べつに出家を勧めているわけではなく、慾情を断てと説いているにすぎない。「無無」や「有有」も深い含意があるわけではなく、「無」や「有」とおなじ意味に使ったものと思われる。慾情を断った状態が「無」であり、「神氣」の働きという面から「有」と言ったのであろう。重陽にも「指迷頌」(『全真集』卷九・三b)「無無有有無端、有有無無有有攢、無有有無無有相、有無無有有無看」があるが、ほとんどことばの遊びである。

⑩ 「勸衆修持」卷上二四a~二五a、第一首

学道仮除仮 道を学んで仮に仮を除き

修真空鍊空 真を修めて空に空を鍊る

本源帰一処 本源 一処に帰す

明月与清風 明月と清風

「仮」と「空」は、むろん仏教由来のことばである。「仮に仮を除」けば「空」となるが、その「空」はまだ観念的なもので、本来の「空」ではないから、「空に空を鍊る」と言ったのであろう。この考え方については、『全真集』卷一・二四a「宋公問修行」に「空裏依空現本空」とあるのが参考になる。ただ、重陽の表現は仏教から仮りたものといふより、『太上老君説常清静妙経』(藏三冊)に「觀空以空、空無所空。所空既無、無無亦無。無無既無、湛然常寂」とあるのなどを踏まえたものと思われる。「明月」と「清風」は、よく対にして用いられる。『全真集』卷一・二四a「修行」第二首に「清風裏面全真氣(既出)、明月前頭結宝砂」、卷二・二四b「述懷」第一二首「独住三峰誰作伴、清風明月共三人」などと使う。いずれも修養完成の境地を象徴的に表わしたものである。

⑪ 「勸衆修持」第二首

酒色気財尽 酒色気財尽き

憂愁思慮忘 憂愁思慮を忘れ

攀縁愛念絶 攀縁愛念を絶ち

五葉玉蓮芳 五葉の玉蓮芳し

「酒色気財（普通は酒色財気）、憂愁思慮、攀縁愛念（普通は攀縁愛念が憂愁思慮より先）」は『重陽教化集』（藏六辛大冊）卷二・三 a 「化丹陽」に「凡人修道、先須依此二十二箇字断、酒色云云」とあるように、重陽が弟子たちに与えた戒めである。丹陽もまたこれを弟子たちに教えた（『金玉集』卷五・二 a 「示門人」）。「五葉の玉蓮」は修養の完成した境界の表現で、『全真集』卷一・二六 a 「修行」第一〇首に「撒向瑶池種玉蓮、……弘開五葉各团円」とある。

⑫ 「勸衆修持」第三首

大道常清静 大道は常に清静

無為守自然 無為にして自然を守る

自心不廻転 自心の廻転せずんば

何処覚言伝 何処にか言伝を覚めん

これは、自発的に道に回心することの必要を言っている。表現は定型的である。「言伝」は本来は「口訣」などの伝法のことばで、『全真集』卷二・六 b 「遇師」に「口訣伝来便有功」とあるのが参考になろう。ただ、ここでは、大道は無為なるもので、自分の方から働きかけなければ真理は伝えてくれない、というほどの意味であろう。

⑬ 「勸衆修持」第四首

独坐若環菴 独坐すれば環菴の若しごと

孤清味最甘 孤清の味最も甘し

儻然無一事 儻然として一事も無く

默默守三三 默默として三三を守る

これは独坐して修養する境地を言ったものである。独坐すれば、そこがすでに環堵草庵の中のようにであり、まわりから煩わされることもなく、心中は澄んで何事も気にかからない、と。「儻然」は「悠然」とおなじ意味に使ったのであろう。「三三」は、よく判らない。『重陽分梨十化集』（藏七五冊）卷上二a「贈丹陽夫婦」に「唯公芋栗兩般餐、道味応同此味甘、六六正当呼十二、前三三与後三三」とあり、元来は梨を分割して与えた数らしい。「十二」とは「重樓」、すなわち頸骨のあたりを指すと思われる。丹陽も「三三」の語をよく使っており、たとえば、『金玉集』卷一・三〇b「十絶」第四首に「悟六六通明六六、前三三。証後三三」、同・卷二・七a「和茶殿試韻」第三首に「靈明六六与三三」、同・卷六・七a「聯句」に「六六陰消丹燦燦、三三陽聚性靈靈」などがある。なお、重陽はまた『重陽教化集』卷一・三〇b「贈丹陽三移床三更飯題絶句」で「故把床移飯飯改移、三三如六怎生知、教公会得双関事、雪裏瓊花総是誰」と説いている。「双関」は「氣」が体内をめぐる場合のポイントとなる箇所らしい。要するに、四句は養気のメカニズムを説くもののようにある。⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾

⑭ 「勸衆修持」第五首

採得波羅藥 波羅の藥を採り得て

製成般若茶 般若の茶を製成す

湯澆清淨水

湯は清淨水を澆ぎ

啜罷見黃芽

啜り罷りて黃芽を見る

これは「茶」によって修養の境地を説いている。この説き方は重陽に従ったのであろう。『全真集』卷一・一八aに「詠茶」、同・卷一・三bに「和伝長老分茶」の詩があり、後者には「湯澆雪浪於中白」の句がみえる。

⑮ 「勸衆修持」第六首

常觀慾為苦

常に慾を觀て苦と為さば

瓦礫變黃金

瓦礫は黃金に變ず

觀身如糞土

身を糞土の如く觀れば

明月照瑤岑

明月は瑤岑を照らす

これは世俗的欲望とわが身からの超越を説いている。わが身からの超越とは養氣の思想と矛盾するようであるが、三句は、一、二句を踏まえて、「酒色」などの身体的欲望を否定したのであろう。「瑤岑」とは、玉のように美しい峰の意味であろうが、やはり修養完成の境地を象徴した表現であろう。『全真集』卷一・六a「贈馬銜名」に「□花台上倚瑤岑」とある。

⑯ 「勸衆修持」第七首

心生清爽少

心生ずれば清爽少なく

語默氣神和

語黙すれば氣神和す

清淨消諸孽

清淨にして諸孽消え

無為解衆魔 無為にして衆魔を解く

これは「心」や「語」(主観の働きやその表出)を撥無して「清淨無為」になれば「気神」が調和して「諸孽衆魔」が解消してしまう、と説いている。「孽」や「魔」が具体的に何を指すか明瞭ではなく、聴衆によって違ったイメージを持ったと思われるが、一般的に言えば、これまで為してきたもろもろの罪過や、修養の障害となる感情や思考の働きのきであろう。

『水雲集』中、門人や道衆に与えた詩は右のとおりである。詞には、それを題にしたものはない。表現上、門人や道衆に与えたことが判る詞は多いが、いま、それらを検討することは省略しておく。本稿では、つぎの語録を検討するにとどめたい。

⑩ 「示門人語録」卷上三〇b～三二a

この語録は『真仙直指語録』(藏宏卅冊)卷上にも収録され、字句に若干の異同がある。はなはだ読みにくい文章であり、句読は暫定的なものである。⁽³¹⁾内容は、だいたいつぎのようである。⁽³²⁾

およそ人が輪廻をして生死をくりかえすのは、心があるからにほかならない。得山⁽³³⁾が言っている、「心が生じると種々の法も生じる。心が滅すると種々の法も滅する」と。もし一念をも生じなければ、生死から脱却(できるの)だ。なにを「心がある」と言うのか。思うに(心があるのは)衆生には貪嗔癡という三つの毒⁽³⁴⁾、無明心があることによるのだ。(重陽)師父が「三山口を跳び出す」と言われたのが、そのことなのである。それゆえ、悟った人は修行して、⁽³⁶⁾自己の感情を断ち家族への愛情を棄て、強情をくだき鋭敏をくじき、衆生の不善なる心を降伏させ除滅するのだ。も

しも父母のまだ生まれない時の眞性(37)を見たければ、本来の面目(38)がそれである。なにを「不善なる心」と言うのか。あらゆる対象について無明なるけちや欲ばり、嫉妬、財産や色欲の心を起こして、いろいろな計算や思わくが生じたり無くなったりしてとどまらないことだ。こうした孽障(39)となる昔から馴れてきた心持によって、眞源がくちまされてしまふと、解脱はできない。もしも(孽障を)除き滅びつくしてしまいたければ、すなわち自性を見よ。どのようなことを「自性を見る」と言うのか。一日中、念々が清静であつて、いっさいの昔から馴(40)じんだ心持によって眞源がくちまされることなく、常に虚空にいるように逍遙自在であり、自然に神と気が交わり合つて調和するということだ。修行をして、もしこのことを身につければ、さらになんの生死を怖がり、なんの罪孽(41)を懼れることがあるうか。もし少しでも一念を生ずれば、清浄ではない。それはつまり罣碍(42)であり、自在とは言わないのだ。どのようにして(自在の境地に)到れるのか。ただ、皆の志が山のように、動かす揺がずに、前に進んでゆくことが必要だ。大魔に出あつたとしても、この一身をあげてすつと廻顧(43)しなければ、前期(44)はかならず身につけられる。晋真人も言われた、「心意が清浄なのは天堂への道であり、心意が荒乱(45)るのは地獄への門である」と。

以上が語録の内容である。輪廻は道士も説くことで、たとえば『鍾呂伝道集』の「論眞仙第一」の冒頭からして、なぜ常人が輪廻するののかについて説明している。以下、語録は、一読して明らかなように仏教の用語をきわめて多用している。ただ、道教としての特色は、やはり「神氣交媾沖和」という養氣の情況を述べた点にあり、そのほかのことばは、すべてそのための説明であると言つても、あながち過言ではない。そこで、「一念」とは、おそらく仏教で説くような厳密なもの、つまりあらゆる思考作用を含むもの、ではなく、貪嗔癡などの具体的俗心について述べたものであろう。なお、「前期」は「前程」とおなじで、修養の進歩した境界であらう。全体的に言えば、俗情を起こさ

ずい修行してゆけば、自然に養氣ができる、という説き方は、詩の訓示にみた教えとおなじである。

門人や道衆に与えた訓戒は、一言でいえば、俗情を断つて養氣せよ、ということである。そのことを長真なりにさまざまな角度から述べているのであるが、重陽や丹陽の教説にくらべると表現は単調である。また、当然のことながら、酒色財氣⁽⁴³⁾の訓戒など重陽の教説をそのまま祖述しているものもあり、長真が重陽の教説を墨守した様子がわかる。俗情を断つとは、自己の感情や家族への愛情を断ち、無欲にして自我を捨て、口弁を去り、自己と世俗世界とは無関係だとする「閑」の心持でいること、である。そのうえで長真が強調したことは、徹底して求心的な養氣の修行であった。それは神氣の調和という一点に集約される。神氣とは性命、つまり心身に相当すると思われる。長真は、心身が自己完結して働く境地に到るよう教示したのである。

長真の用語には仏教語が目だつ。仏教語は重陽や丹陽もよく使い、むしろ彼らよりずっと以前から道士の用語になっていたものも多いが、なおかつ、本節で見たものにおいてはその使用が顕著である。このことは、長真が重陽に弟子入りする以前に生きていた知的環境を暗示するものかもしれないが、いっぽう、詞には道教的用語が多く、長真と仏教語の問題については、今後なお検討を要する。

(二) 述懐や自詠にみられる思想

本節では「述懐」もしくは「自詠」の題をもつ作品について検討する。長真の詩詞を内容上から分類するのは困難であるが、本節で検討するものは、前節のものとならんで、それらが作られた情況は比較的是っきりしている。

① 「述懐」 卷上四a、六b、第一首

自慕貧閑採妙機 自ら貧閑を慕って妙機を探り

便知身入白雲飛 便ち身の白雲に入りて飛ぶを知る

逍遙物外超塵網 逍遙として物外に塵網を超え

脱灑懷中解垢衣 懷中を脱灑して垢衣を解く

恐損陰功搜己過 陰功を損するを恐れて己れの過を搜し

慮傷道德法人非 道德を傷るを慮って人の非を怯る

他時九転丹砂就 他時九転の丹砂就らば

同約三仙從我婦 同じく三仙と約して我に従いて婦らん

みずから貧閑を求める、という表現は、長真の詩詞によくみえるものであって、「漢宮春」第三首（巻下二〇b）にも「自慕貧閑、便摧強挫銳、柔弱和光」とある。この表現には、寧海の中流家庭の出身であるという事情が込められているのであろう。「逍遙物外」も常套句であり、「醉江月」第二首（巻中二b）にも「寂淡偏宜、貧閑最好、物外逍遙處」とある。「怯人非」は、人の非をそのままにしておくことを恐れるということであろう。そこに布教の根柢も存するわけである。「三仙」とは、丹陽、長生、長春を指すと思われる。「從我婦」は自分といっしょに帰ろうというほどの意味で、帰るところは、むろん仙境である。この詩は、「陰功」を損なうことを恐れてひたすら自己一身の修養にとめる点に力点があり、「九転丹砂」の完成を願うきわめて求心的なものである。

② 「述懐」 第二首

挫銳摧彊作善良 銳を挫き彊を摧き善良と作り

頓然心法兩俱忘 頓然として心と法を兩つながら俱に忘る

鼎中頻起金剛焰 鼎中には頻りに金剛の焰を起こし

爐内常燃般若香 爐内には常に般若の香が燃ゆ

玉藥乍芳惟独採 玉藥は乍芳しく惟れ独り採り

蟠桃初熟与先嘗 蟠桃は初めて熟れて与に先ず嘗う

莫言迢遞華胥国 迢遞なり華胥の国と言ふこと莫れ

了了空虚路不長 空虚を了了すれば路長からず

この詩は、前節⑤の措辞と重なるところが多い。内容も同じようなものである。「蟠桃」も修養完成の状態を表わすものとしてよく使われ、「如夢令」第一四首（卷中三b）に「共飲蟠桃仙酒」とある。また、『全真集』卷一・三a「問清閑」に「任遊三島訪蟠桃」とある。

③ 「述懐」 第三首

一条捷徑入仙源 一条の捷徑仙源に入り

洞口靈雲覆翠巔 洞口の靈雲翠巔を覆う

風浪起時揮慧劍 風浪の起こる時慧劍を揮い

玄波澄処採金蓮 玄波の澄む処金蓮を採る

蛟竜降去离宮臥

蛟竜は降し去って离宮に臥し

猛虎擒来坎戸眠

猛虎は擒え来て坎戸に眠る

二物定閑人事尽

二物定まり閑にして人事尽き

功円行満産胎仙

功は円かに行は満ちて胎仙を産む

これは養氣の情況を詠んでいる。「風浪」、「玄波」は俗情のことであろう。「离(離)坎」は「火水」つまり「心腎」を表わす。したがって、「竜虎」は通常は「神氣」つまり「性命」を表わす(二十四訣)か、「肝肺」の氣を表わす(鍾呂伝道集)論龍虎)かであるが、ここでは氣が行って「心腎」に至った状態を示していると思われる。「功行」は、いわゆる自利利他に相当するが、ここでは「二物定閑」の表現から見ても、「行功」で内修を指すと思われる。「胎仙」については前節⑥参照。

④ 「述懐」第四首

為慕仙源景物長

仙源の景物を慕うこと長きが為に

滌除靈地布瓊芳

靈地を滌除して瓊芳を布く

南宮赤子居涼殿

南宮の赤子は涼殿に居り

北海烏龜住絳房

北海の烏龜は絳房に住む

清静洞中囚白虎

清静なる洞中に白虎を囚え

無為山上牧青羊

無為の山上に青羊を牧す

自從鼎内雲収後

鼎内に雲収まりて自從り後

常飲醍醐臥醉郷 常に醍醐を飲んで醉郷に臥す

これも養気の情況を詠んだものである。「南宮赤子」と「北海烏龜」は、南と北、赤と黒、火と水の対立を示したもので、つまり「心」と「腎」の気の象徴であろう。これらが「涼殿」と「絳房」に居住するのは、いわゆる気の「交媾」である。『全真集』巻一・二四a「修行」第一首に「赤衣上士遊山水、烏帽先生入火池」、同第三首に「烏龜行向海中戲、赤鳳飛來頂上巢」、同・巻二・二三b「述懷」第五首に「從此烏龜投碧海、火炎山上喜朱郎」、同・巻一〇・九a「述懷」に「烏帽嬰兒添碩水、朱衣姪女運陳玄」などあるのと同じことを述べたのであろう。「絳房」は、『全真集』巻二・三a「述懷」第一首の「絳宮」と同工であらう。「白虎」、「青羊」はそれぞれ「肺」と「肝」の気と思われる。「鼎内雲収」は「酌江月」第四首(巻中a)に「鼎内雲収、爐中丹結、九転終重遇」とある。

⑤ 「述懷」第五首

寂寥瀟灑道家 寂寥瀟灑たり道人の家

守弱随縁度歳華 弱を守り縁に随いて歳華を度る

禦冷麤衣唯紙布 冷を禦ぐ麤衣は唯だ紙布

充飢淡飯有藟苳 飢を充たす淡飯には藟苳あり

忘言淡薄人情遠 言を忘れ淡薄にして人情より遠く

絶慮幽閑道況除 慮を絶ち幽閑にして道況は除なり

着恋妻兒名利者 妻兒名利に着恋する者は

限臨猛悟悔如麻 限の臨むに猛悟すれども悔は麻の如し

これは、俗情を絶ち、言慮を忘れ、簡素な修行生活を送ることを述べている。「歳華」は年月、光陰のこと、「禦冷」は「贈穆先生」(卷中_{五b})に「禦寒時紙布為衣」とある。「淡飯(粥)」は「神光燦」第六首(卷中_{五a})に「淡飯禦衣、黙然保鍊靈明」とみえる。「薑蔗」は、菰米まこものあえものである。「妻兒」については「神光燦」第五首(卷中_{四b})に「恩愛妻兒、都是宿世冤讎」とある。「限臨」は死期を表わす常套語で、「神光燦」第四首(卷中_{四b})に「百歳雲間電閃、限臨頭那肯從容」、同第六首に「遭他恁般繫絆、限臨頭独赴泉冥」とあり、丁寧に言えば「沁園春」第一首(卷下_{1a})に「謾使心機、空生計較、大限臨頭執替伊」とあるような表現となる。

⑥ 「述懷」第六首

天機深遠少人知 天機は深遠にして人の知ること少なく

一粒刀圭午上持 一粒の刀圭を午上に持す

霧捲古潭秋静夜 霧は古潭を捲く秋の静夜

雲収碧嶂月明時 雲は碧嶂に収まり月明るき時

蛟竜捉得囚离鼎 蛟竜を捉え得て离鼎に囚え

猛虎擒来鑠坎池 猛虎を擒え来て坎池に鑠ぐ

煉就仙丹超造化 煉りて仙丹を就し造化を超え

去奔蓬島礼真師 蓬島に去奔きて真師に礼す

これは、養気的情況を詠んだものである。「一粒刀圭」とは出入の気ならびに津液のことらしい。⁽⁴⁷⁾ 気のめぐりは時刻と密接に関係し、「午」がそのポイントとなるらしい。⁽⁴⁸⁾ 「雲捲」以下三、四句は、清静の境地において体内をめぐ

気の場合であろうが、詳細は不明である。「蛟竜」以下五、六句は③の五、六句とおなじ意味であろう。「超造化」の語は、『全真集』巻一・二六 a 「修行」第二一首に「智者便知超造化」とある。

⑦ 「述懐」第七首

瑟瑟飄飄風入松 瑟瑟飄飄として風は松に入り

遨遊物外与仙同 物外に遨遊して仙と同ず

性如朗月流青漢 性は朗月の青漢を流るるが如く

心似閑雲任碧空 心は閑雲の碧空に任ずるに似る

猛虎擒来囚坎戸 猛虎を擒え来て坎戸に囚え

蛟竜降去鑱离宮 蛟竜を降し去って离宮に鑱ぐ

周天頻起金剛焰 周天頻りに金剛の焰を起こし

鍛鍊炉爐一粒紅 鍛鍊して爐中の一粒は紅なり

これは修養の成就する情況を詠んだものであろう。松風は「物外」を際だたせる表現であろう。「遨遊物外」は「如夢令」第六首(巻中二 a)に「物外遨遊落魄」とある。「性如」以下二、三句は、「性」や「心」がとらわれていないことを述べたものであり、『全真集』巻一・二三 a 「人戲言欲盜脚引」に「心如朗月天心運、性似清風道性流」とあるのにおなじであろう。また、月が天を流れるという表現は、「満路花」第三首(巻下八 b)に「一輪明月流天」とある。「猛虎」以下六、七句は③④のそれらとおなじ。「周天云々」は体内の気の運行、調和を述べたものであろう。丹が紅くなるのは完成したありさまであり、『全真集』巻一・三三 a 「述懐」に「一粒金丹色変紅」とある。

⑧ 「述懐」第八首

光明一点照楼台 光明一点楼台を照らし

了了無生絶去来 無生を了了きわりて去来を絶つ

七宝山頭紅焰滅 七宝の山頭に紅焰滅し

三宮靈地白蓮開 三宮の靈地に白蓮開く

煙霞紫府応將到 煙霞の紫府に応に將に到るべく

雲路瀛洲去不廻 雲路の瀛洲に去りて廻かえらず

不夜玉京誰有分 不夜と玉京は誰か分有るや

長春仙子四人陪 長春の仙子四人陪す

これも修養の成就する情況を詠んだものであろう。「光明一点」は「西江月」第一首（卷中三三）に「光明一点照無為」とある。「去来」は「如夢令」第二首に「坐臥去来空、便是清涼彼岸」とある。「七宝」は身体を金銀などになぞらえたものであり、『全真集』卷二・三 b「活死人墓贈甯伯功」第二四首に「鍊取純陽身七宝、無生路上不生塵」とある。王重陽が大定八年（一一六八）に山東ではじめて作った教団組織も「七宝会」という名である。⁽⁵⁰⁾ただ、具体的に身体の何を指すかは未詳である。「山頭」は前節⑥参照。「紅焰」は身を焼く俗情の火であらう。『全真集』卷一〇・三 b「剔燈杖」に「怎知紅焰返燒身」とある。火が消えて白蓮が開くことについては、「西江月」第二首（卷中一七）に「火裏蓮生、山頭焰滅、端的緣相遇」、「西江月」第三首（卷中二四 a）に「火滅蓮開五葉」とある。「三宮」は『諸真内丹集要』（藏九冊）卷中「金丹類名」に「神居乾宮、炁居中宮、精居坤宮、謂之三宮」とある。「不夜」も「玉京」も神

仙の居る場所で、修業の完成した境地のことであろう。『全真集』卷一〇・五a「友求清静」第二首に「八識精研通不夜、五門光顯照長春。」とあり、同・卷二・一九a「馬鈺從化以此贈之」に「玉京山上為鵬化、隨我扶搖入洞天」とある。⁽⁹⁾「有分」は「沁園春」第三首(卷下下)に、「修行路、悟輪廻生死、有分仙流」とある。そこに所屬するといふ意味であろう。「長春」は、上に引いた例にもあるように、やはり修養の完成した情況を表わす語の一つであろう。『全真集』卷一・七b「修行助饑寒者云々」に「此中搜得長春景、便是逍遙出六塵」、同・卷一・二六a「修行」第一〇首に「長春境上不排年」などがある。

⑨ 「述懷」第九首

青蛇三尺袖中携 青蛇三尺袖中に携え

一粒丹砂結正時 一粒の丹砂正時に結ぶ

霧罩清溟囚馬子 霧は清溟に罩りて馬子を囚え

煙籠碧嶂鑱猿兒 煙は碧嶂に籠りて猿兒を鑱ぐ

千朝行滿竜投火 千朝の行満ちて竜は火に投じ

九転功成虎入池 九転の功成りて虎は池に入る

奪得虚無真造化 虚無なる真の造化を奪い得て

天機深遠少人知 天機は深遠にして人の知ること少なし

これも修行の成就する情況であろう。「青蛇」は不詳であるが、『二十四訣』に「蛇者、是心中嘉炁也」とあり、ここもそれであろうか。「馬子」、「猿兒」は「意」と「心」のこと(二十四訣)で、「霧罩」以下の三、四句の内容は、

⑥の三、四句に相当し、「千朝」以下の五、六句は⑥⑦の五、六句に相当するものであろう。「千朝行滿」は「神光燦」第二首（卷中**三**）に「千朝功夫做就、這些兒暗裏相伝。功行滿、跨祥雲歸去朝元」とある。

⑩ 「述懷」第一〇首

愆情巧勝染多言 愆情の巧み勝れて多言に染み

悟此方離種種辺 此の方を悟りて種々の辺を離る

愆断情忘通妙理 愆を断ち情を忘れて妙理に通じ

煙消火滅達幽玄 煙は消え火は滅して幽玄に達す

口張舌拳功難就 口の張り舌の拳がるは功就り難く

意出心生行怎円 意の出で心の生ずるは行怎ぞ円かなる

絶了人情無箇事 人情を絶了して箇の事無く

寂寥孤淡任残年 寂寥として孤り淡として残年に任す

これは俗情からの脱却を述べている。「妙理」が俗でないことは、「詠竹」（卷中**三**）にも「妙理皆非俗」とある。

愆情、弁口、人情、心意などの否定は、長真のよく説くことである。「煙消火滅」も俗情を脱した境地をあらわす常套句であり、「贈趙先生」（卷中**三**）に「火滅煙消、靈腑自吐黄芽」、「水竜吟」第二首（卷中**九**）に「煙消火滅、氷凝玉結、長生芝草」などとある。

⑪ 「述懷」第一一首

真功真行密安排 真功真行を密かに安排し

十載殷勤細細裁 十載殷勤に細細と裁る

俗境心忘超彼岸 俗境の心を忘れて彼岸に超え

凡情意滅到蓬萊 凡情の意を滅して蓬萊に到る

地埋宝劍光衝斗 地は宝劍を埋めて光は斗を衝き

蚌隱明珠暗養胎 蚌は明珠を隠して暗に胎を養う

修鍊須憑真造化 修鍊は須らく真の造化に憑るべく

欲窮造化鍊心灰 造化を窮めて心灰を鍊らんと欲す

これは修行の心がまえを述べている。「真功真行」については③参照。「十載」の表現から見ても、これも後出の次節⑫⑬とおなじく大定二一年（一一八一）以降の作であろう。既出の「述懐」一一首が一時に創作されたとはかぎらないが、おそらく、ごく短時日にまとめて作られたものであろう。「細細」の用例は「如夢令」第六首（卷中二a）に「細細人情除削」とある。「殷勤」と同様の意味であろう。

⑫ 「自詠」卷上六b

従初割愛做修持 初め従り愛を割き修持を做し

守一清貧志不移 守一清貧にして志移らず

竹笠羊皮常作伴 竹笠と羊皮を常に伴と作し

破氈腋袋毎相隨 破氈と腋袋は毎に相い隨う

肥羊細酒全無愛 肥羊と細酒は全て愛すること無く

淡飯残羹且療飢

淡飯と残羹は且く飢を療す

木椀乞錢新置得

木椀に乞錢して新たに置き得て

乞禱猶是出家時

乞禱は猶お是れ出家の時

これは、道士の所持品や服装、食べ物などを詠み込んだ詩である。一、二のものに触れた詩詞は少なくないが、これだけ日常生活を描いたものは珍しい。ただし、内容は紋切り型である。「竹笠」は「如夢令」第二首（卷中二〇b）にも「竹笠竹冠竹椀、与我日常為伴」とある。「木椀」のほかに「竹椀」も使用したことがわかる。「羊皮」や「破氈（破れ毛布）」は寝具として使ったようである。「繼丹陽師叔Y誓吟韻」（卷上三〇a）に「住与行、坐与睡、或披氈、或紙被」とある。「腋袋」には経文なども入れたらしい。「細酒」は、「細食」が「煮熟的食品」（『宋元語言詞典』）であることを考えれば、よく熟成された美酒のことであろうか。「淡飯残羹」については、「西江月」第六首（卷中二〇b）に「残羹冷飯且充齋」とあり、同第七首（卷中二一a）に「寒後添些紙布、飢来乞覓殘余」とある。「乞禱」は俗語であろうが不詳。「歌」其三落魄第二首（卷上二九b）にも「衲布乞禱常恁着」とある。「衲布」は、つぎはぎの道衣であろう。

こうした物を詠みこんだものとしては、王重陽にも『全真集』卷五・一b「月中仙自詠」に、つぎのようなものがある。「自問王三、你害風を因縁として、心を何処に下すや。顔を怕ばし独り晒い、死生生死の（生を死に死を生きる？）為に、最も分明と抛り、転た神性をして悟らしめ、更に人の五袴（富裕のこと）を誇るを羨むに備し。愈清涼の地を覺り、皮毛は無用にして、那ぞ更に絲絮を憶わんや。渾身頭わすを要するの時、這の中衫の青白、総て是れ麻布、葫蘆に薬を貯え、また腋袋には経文、人の苦を拯救す。竹を携えて常に杖柱とし、自在に待す、逍遙たる鍾呂の道、余の掃去するの路・煙霞の侶（自問王三、你因縁害風、心下何処。怡顔独晒、為死生生死、最分明抛。転令神性

悟。更慵羨人誇五袴。愈覺清涼地、皮毛無用、那更憶絲絮。 渾身要顯之時、這巾衫青白、總是麻布。葫蘆貯藥、又腋袋經文、拯救人苦。竹携常杖柱、侍自在、逍遙鍾呂道、余婦去路煙霞侶。」後半の「侍自在」以下は定型詞と字数が合わないため、句読は暫定的のものである。この詞によるかぎり、重陽は「羊皮」、「破氈」さえ所持しなかったらしい。身につけたものは青巾と白衫で、すべて麻布のものというのは、粗末なものの意味であろう。長真には、「歌」其三番魄（卷上二九 a）に「渾身紙布為衣著」や「沁園春」第三首（卷下二 a）に「頂青巾布素」の表現がある。重陽の「葫蘆」には、酒ならぬ薬がたくわえられ、「腋衣」には経が入れられた。これらは、すべて人の苦しみを救うためのものである。そして常に竹の杖をつき、逍遙自在に行脚したわけである。長真にもまた、「踏莎行」第一首（卷下二五 a）に「携筇独上長安路」の表現があり、竹杖を使ったことがわかる。

⑬ 「述懷」卷上二 b ~ 三 a、第一首

不会搜空向外尋 空を搜すに外に向って尋ねるを会^よず

蛟竜猛虎倒顛擒 蛟竜猛虎を倒顛^{ふし}にして擒う

朝昏懶慢修香火 朝昏に懶慢にして香火を修す

十二時中只礼心 十二時中 只だ心に礼す

これは、自己の内心にむかって修養すべきことを詠んだものである。おなじ思想をあらわすものに、「贈濬州王三校尉」（卷上三 b）に「罌功須向性中求」、「西江月」第二首（卷中四 a）に「学道休於外覓、靈苗出自心田」などの句がある。氣持が外にむかえば養氣はうまくいかないから、「礼心」して心に集中すべし、と言うのであろう。二、三句はマイナス方向のことを述べたものと思われる。

⑭ 「述懷」第二首

昏昏默默探玄玄 昏昏默默として玄玄を探り
清静無為守自然 清静無為にして自然を守る
真性得凝真氣助 真性凝すを得て真氣を助け
無窮變化可冲天 無窮に變化して天に沖る可し

これは、常套句をつらねて修養の完成する情況を詠んだものである。

⑮ 「述懷」第三首

我今雲水是前期 我れ今雲水にして是れ前期
細細常觀八句詩 細細と常に觀る八句の詩
若要延齡增壽算 若し齡を延ばし壽算を増さんことを要むれば
金精專固認真慈 金精を専ら固めて真慈を認めよ

これは、修行の心がまえを詠んだものである。「前期」は、前節⑭に見たように、修養の成就を意味することばであるが、ここでは、以前から期していたこと、の意味が含まれるかもしれない。「八句詩」が具体的に何を意味するかは不詳。「細細」は、細心に、氣をつけて、の意味の常套語である。⑮参照。「金精」は体内の純粹な「氣」である。『太丹直指』には「三田返復肘後飛金精」が収録されている。その説明に、施肩吾のこゝばを引いて「子時、以肺之精華之氣、併在腎中、号曰金精」とある。

⑯ 「述懷」第四首

一月二十九日飲 一月二十九日飲み

百年三万六千場 百年三万六千場

世間尽不聞吾事 世間は尽く吾が事を聞かず

帰去来兮入醉郷 帰りに去来して酔郷に入らん

これは、「飲」を縁語として「酔郷」と言っているが、むしろ道士としての修行を比喻したものである。

⑰ 「述懐」第五首

従前頑悪驕麤豪 従前は頑悪にして麤豪を驕にし

今日存心望孽消 今日存心して孽の消ゆるを望む

十二時中常覚察 十二時中 常に覚察すれば

知他天地背相饒 他天地の相い饒にするを背うを知らん

これは、入道の前後の生活を対比させて、入道すれば天地のめぐみを感じ得ることができることを述べているが、「天地」とは、直接には自己身中の天地を指し、それと重ねるかたちで現実の天地を見ているのであろう。

⑱ 「述懐」第六首

蛾恋燈光焰不知 蛾は燈光を恋いて焰を知らず

魚貪香餌亦如斯 魚は香餌を貪りて亦た斯くの如し

蛾焦魚爛君知否 蛾は焦げ魚は爛れるを君は知るや否や

好向祇園寄一枝 祇園に向って一枝を寄するに好し

これは、実は身を滅ぼすものである「燈光」や「香餌」という俗世間の誘惑を逃れて出家生活をすることを薦めたものである。「祇園」のことは、『大般涅槃經』卷二九「師子吼菩薩品」(大正二・三二a b)参照。「寄一枝」は不詳。

⑱ 「述懷」第七首

譚馬丘劉四箇師 譚馬丘劉の四箇の師

逍遙自在做修持 逍遙自在に修持を做す

周天磨鍊無窮宝 周天磨鍊す無窮の宝

一片靈光自得知 一片の靈光まがす自から知るを得る

これは修行生活の一齣を詠んだもの。「周天」については⑦参照。

⑳ 「述懷」第八首

古仏靈巖是我家 古仏の靈巖は是れ我が家

清涼境界絕憂嗟 清涼の境界に憂嗟を絶つ

道人活計無他做 道人の活計は他の做すこと無し

唯採三光鍊碧霞 唯だ三光を採り碧霞を鍊る

これは、道士の修養のありさまを述べたものである。「清涼境界」は、道士もよく使うことばであり、「題孔先生控中」(卷上三a)に「清涼境界超塵路」などがある。「道人活計」も常套句で、「連理枝」(卷中三a)に「寂淡貧閑、隨緣度日、道人活計」、「永遇樂贈潯州王三校尉」(卷下二b)に「一蓑一笠、隨緣且過、便是道人活計」などがある。「三光」は、一般的には、むろん日月星辰のことであるが、ここでは内三宝としての「精氣神」を指すと思われる。『二

十四訣』に「天有三才、日月星。……人有三才、精神炁、是也」とある。長真の用語としては、「望海潮」第二首（巻下三〇）に「認三光真秀、疑結丹砂」その他がある。「碧霞」は、「光」を縁語として「霞」という自然現象を表わす語を使用しているが、いわゆる大丹を象徴する表現であろう。

② 「述懐」第九首

如今識破恋燈蛾

如し今 識破るれば燈を恋うるの蛾

愛餌迷魚戯黒波

餌を愛する迷魚は黒波に戯る

本是一団腥穢物

本と是れ一団の腥穢の物

塗捺模様巧成魔

模様を塗捺して巧みに魔を成す

これは⑩と内容が近い。「黒波」は迷いの境地をあらわす。「贈濬州王三校尉」（巻中八）に「欲成修鍊、須出黒風波」とある。同詞には、つづけて「慧劍攀縁割斷、離郷土趕却娘哥」とあり、「黒風波」が具体的には家族や郷土への愛着を意味することがわかる。なお、③に見える「玄波」も同様の意味であろう。

「述懐」、「自詠」の題をもつ詩は右のとおりである。詞には、この題のものはない。これらの題をもつ詩は、一般的にいえば、自己の心情を吐露したものであるが、長真の場合、内容においては他の題詩詞と本質的な区別はない。言っていることは、やはり、俗情を断って養気する、ということにすぎないのである。

俗情とは、妻児名利や郷里への愛着であり、それらを克服して身中の養気に専念しなければ、大限（死期）が迫った時に後悔する、と長真は言う。前節でみたように、長真には輪廻の思想があり、また、仙境への言及も極めて多い

ことから考えれば、修行は単なる延命のためだけではなく、死後の安寧をもめざしたものとと言えるであろう。ただ、死後のことについては、本当にそう信じて言っているのか、道を説く方便として述べているのか、それとも単に修辭として表現しているにすぎないのか、なお検討の余地がある。しかし、長真の生涯や、さらに重陽や丹陽の生平をあわせ考えてみると、いわゆる靈魂不滅とでもいうべき心情は、道士たちにかなり強く存していたように思われる。

本節に特徴的なことは、長真の日常生活の一端が伺われることである。その意味では、本節の題詩の範圍はそれなりに意味をもつとも言つてよい。長真は、竹笠をかむり、青巾をつけ、素布（紙布）の粗末な着物を着、腋袋を下げ、羊皮や破れ毛布を携え、竹杖を突いて歩いた。葉も携えたはずであるから、重陽とおなじように葫蘆も持っていたことであろう。粥や残羹を求めて一時の飢を充たし、あるいは木碗に乞錢した。長真の行脚の姿は、このようなものであったに違いない。

(三) 道を詠んだものにみられる思想

道を詠んだものとは曖昧な範圍であり、すべての詩詞がこれに該当するとも言えるけれども、ここでは「暢道」と「頌」の題をもつ詩を中心に、一、二、三の詩詞をあわせて考察したい。

① 「暢道」 卷上六b~九b、第一首

雲水遊遊物外仙 雲水遊遊す物外の仙

刀圭一粒断塵縁 刀圭の一粒 塵縁を断つ

真空結就三田宝 真空に結就す三田の宝

妙用円成五葉蓮 妙用して円成す五葉の蓮

火滅煙消因鍛鍊 火の滅し煙の消ゆるは鍛鍊に因り

心清意静為精專 心の清く意の静かなるは精の専なる為なり

逍遙放蕩長真子 逍遙放蕩す長真子

万里飄飄般若船 万里飄飄たる般若の船

これ以下三首の「暢道」の題をもつ詩は、修鍊によって道が完成したありさまを述べている。「遊遊物外」は前節⑦に既出、「刀圭一粒」は前節⑧参照。「五葉蓮」については本章（以下、特に断わらないかぎり本章のこと）一節⑩参照。「火滅煙消」は前節⑩に見える。

② 「暢道」 第二首

雲水逍遙逐処家 雲水逍遙す逐処の家

任他烏兔易年華 他かの烏兔まかに任せて年華を易う

閑中慧水添金鼎 閑中の慧水金鼎に添え

静裏靈田種玉芽 静裏の靈田玉芽を種す

海底養成紅芍薬 海底に養成す紅芍薬

山頭結就白蓮花 山頭に結就す白蓮花

我今説破超塵宝 我れ今 説破す塵を超ゆるの宝

本有如即大砂 本有は如如にして即ち大砂なり

一句は乞食の情景を詠んだものであろう。「烏兔」は日月のことで、これは道士の専門語ではなく、一般的な言い方である。日月にまかせるといふ表現は、また「満庭芳」第二首（巻中セト）に「任忙烏兔、物換星移」とみえる。「年華」は、前節⑤にみえる「歳華」と同義であろう。「金鼎」については拙稿⁽⁵²⁾参照。「海底」と「山頭」の対応は、一節①に出た。また、一節⑥参照。「本有」は「酹江月」第一首（巻中一a）に「種種皆空掃本有」、「沁園春」第一首（巻下二a）に「元初本有、鍛鍊昏迷」などとある。「大砂」は一節②にみえた。

③ 「暢道」第三首

雲水逍遙物外仙 雲水逍遙す物外の仙

閑閑靜靜本来天 閑閑靜靜たり本来の天

存心滅我開金鑠 存心して我を滅し金鑠を開き

損意忘情折玉蓮 意を損し情を忘れて玉蓮を折る

彼岸岸頭搜密妙 彼岸の岸頭に密妙を搜り

靈山山裏得良縁 靈山の山裏に良縁を得たり

丹成九転清風送 丹は九転を成して清風を送り

解纜飄飄般若船 纜^{ともづな}を解いて飄飄たり般若の船

「本来天」とは、前詩の「本有」と同様、自己の内に先天的に存する「道」をいうのであろう。「遊靈山寺」（巻上二a）には「桂華独現本来心」とある。「密妙」は、重陽が長真に与えた詞にも使われた語である（前章一節）。

④ 「三教」卷上二b

三教由来総一家 三教は由来総て一家

道禪清静不相差 道と禪は清静にして相い差わず

仲尼百行通幽理 仲尼の百行は幽理に通じ

悟者人人跨彩霞 悟者人人は彩霞に跨る

三教同根観は重陽の説くところであり、全真教の一特徴である。重陽にもまた「孫公問三教」(『全真集』卷一・八a)に「儒門釈戸道相通、三教従来一祖風」などの句がある。

⑤ 「頌」卷上二b一七b、第一首

学道修真与世違 道を学び真を修するは世と違い

孤身飄逸断蓬飛 孤身飄逸にして断蓬として飛ぶ

随縁且過消前過 縁に随い且く過ごして前過を消し

視死如帰一不帰 死を視ること帰するが如く一に帰らず

垢面蓬頭摧壯鋭 垢面蓬頭して壯鋭を摧き

麤衣淡飯遠軽肥 麤衣淡飯して軽肥を遠ざく

常清常浄無為作 常に清 常に浄にして無為を作し

十二時中暗察思 十二時中暗に察思す

これは「学道修真」のありさまを述べている。「断蓬飛」は、根の切れたよもぎのように定所のないこと⁽⁵³⁾で、ここ

では雲水の境涯を表わしている。四句は「一不帰」で一まとまりであろうが、いわゆる「不帰」に、出家して世俗の生活には戻らない、という意味を重ねたものであろうか。六句については、前節⑫参照。

⑥ 「頌」 第二首

把捉詢予付少言

把捉を予に詢れば少言を付す

本来無法可相伝

本来法の相い伝う可き無し

是非絶尽方通妙

是非を絶ち尽くして方て妙に通じ

人我俱忘始悟玄

人我を俱に忘れて始めて玄を悟る

清静貧閑為伴侶

清静にして貧閑を伴侶と為し

气財酒色似雛冤

气財酒色は雛冤に似たり

今生若要登雲路

今生に若し雲路に登るを要むれば

不合虚無不得仙

合に虚無ならざれば仙たるを得ず

これは、人我・是非を絶ち尽くして虚無の境地に至ることを述べている。一句はわかりにくいだが、「把捉」とは道の把握、修行の要点を意味するのであろう。「付少言」は「贈趙先生」(卷中_甲)に「予今誠言少付、遇才矛盾納教他」とあるのとおなじであろう。「人我」については、前章第二節参照。

⑦ 「頌」 第三首

宝殿玲瓏倚碧空

宝殿は玲瓏として碧空に倚り

端嚴慈像瑞雲籠

端嚴たる慈像に瑞雲籠もる

三千功裏勤香火 三千の功裏 香火を勤め

十二時中礼聖容 十二時中 聖容に礼す

真体垢除因鍛鍊 真体の垢の除かるるは鍛鍊に因り

靈巖煙散為玄風 靈巖の煙の散ずるは玄風の為なり

閑閑鼎内雲収処 閑閑たる鼎内 雲収まる処

一粒丹砂結就紅 一粒の丹砂 紅を結就す

これは、養氣のありさまを描いたものである。「宝殿」や「慈像」、「聖容」は、いずれも養氣のポイントとなる体内の部位や「氣」のありさまを示すことばであろうが、特定し得るものかどうかは不詳である。

⑧ 「頌」 第四首

十年常黙黙 十年常に黙黙たり

今日露玄機 今日玄機を露わす

水生赤鳳子 水は赤鳳子を生じ

火養黒龜兒 火は黒龜兒を養う

清風吹岳頂 清風は岳頂に吹き

明月照寒溪 明月は寒溪を照らす

降魔神劍親伝得 降魔の神劍を親しく伝え得て

捉住蛟竜把尾提 蛟竜を捉住して尾をば提ぐよりあ

これは、つまり「玄機」を示したものである。この「十年」とは、後出の⑫⑬が大定二年（一一八一）以降のものであることから考えて、やはり大定二一年ごろまでを指すのであろう。「水」と「火」、「赤鳳子」と「黒龜兒」については、前節④参照。

⑨ 「頌」 第五首

心涼腎熱得修持

心は涼 腎は熱く 修持を得たり

悟此方知達妙機

此れを悟りて方て妙機に達するを知る

十二時中無作用

十二時中 作用すること無かれ

馬猿放蕩損靈芝

馬猿の放蕩すれば靈芝を損す

これは、体内の気の調和を述べている。「心」は「赤」、「火」、「陽」に通じ、「腎」は「黒」、「水」、「陰」に通じるので、「心涼腎熱」とは「水火」の「交媾」が行なわれたことを意味している。「馬猿放蕩」とは「意」と「心（ころ、気持）」が勝手に活動することである。

⑩ 「頌」 第六首

毛吞大海誰人解

毛が大海を呑むを誰人か解し

芥納須弥幾箇知

芥が須弥を納れるを幾箇か知らん

日用居常知損益

日用に常に居りて損益を知り

功円行滿見菩提

功は円かに行は満ちて菩提を見る

これは道の働きの妙と悟道の道士の内実を述べている。「日用」とは、道や道士の日々のあり方を言い、長真が重

陽に弟子入りしたときも「公(長真)拜禱真人(重陽)、求道之日用。」(仙跡碑)と、「日用」を問うている。ここでは道士の日常生活の意味であろう。「如夢令」第一一首(卷中三a)に「日用滌除塵垢」とある。「損益」とは、俗情を損し、真氣を益すことであろう。「功行」については、前節③参照。

⑪ 「頌」 第七首

酒色財氣一大関 酒色財氣は一大関なり

意情滅尽出塵寰 意情滅尽して塵寰を出ず

絲毫莫向靈源掛 絲毫も靈源に向つて掛ける莫れ

如掛靈源不結丹 如し靈源に掛ければ丹を結ばず

これは、「酒色財氣」という俗情を無くすことを言っている。

⑫ 「頌」 第八首

六年鍊尽無明火 六年鍊り尽くす無明の火

十載修成換骨丹 十載修成す換骨の丹

湛湛虛堂無罣碍 湛湛として虚堂に罣碍無く

已知跳出死生関 已に知る死生の関を跳出するを

これと次首は、長真が大定二一年(一一八一)以降に華陰の純陽洞に滞在中に作ったものである(前章第三節)。この「六年」と「十載」が、どれほど厳密に言ったものかわからないが、重陽の喪に服していた期間までを「無明火」を滅ぼすべく鍛鍊していた期間だとすると、それから「換骨丹」を修めた「十載」とは、一一二三年までということに

なる。三句と同様の表現は、「贈楊姑」(卷上三a)に「寂澁虛堂無罣碍」というのがある。「死生閼」とは俗世間のことであり、そこを「跳出」したとは仙境に入ったということである。

⑬ 「頌」 第九首

恰十年來學得癡 恰かも十年來 癡を学び得て

騰騰兀兀任東西 騰騰兀兀として東西に任す

欲詢風子修行事 風子に修行の事を詢らんと欲せば

垢面蓬頭火滅時 垢面蓬頭 火滅するの時

これは前首と同時の作成である。「癡」は、ここでは「貪嗔癡」のことではなく、俗情がないことを言ったものであろう。「風子」は長真自身のこと、「火滅時」は、前節⑩や本節①の「煙消火滅」のことであり、俗情を脱却した境地の意味である。⑪⑫⑬は、いずれも俗情をなくして修行することを詠んだものであり、内容的には同じようなものである。

⑭ 「頌」 第一〇首

野鶴孤雲無伴 野鶴と孤雲 伴なく

幽玄至妙忘談 幽玄にして至妙 談を忘る

默默昏昏独守 默默昏昏として独り守り

湛然秋月寒潭 湛然たり秋月の寒潭

これは孤絶にして分別を超越した悟道の境涯を詠んだものである。「忘談」については、「贈鄭仙」(卷上三a)の「潜

心滅跡絶論談」も同じような意味であろう。四句に似たものとして、「遊靈山寺」(卷上a)に「清徹古潭秋静夜」がある。

⑬ 「南柯子」 第二首、卷下四a

雲去南山静　雲　去りて　南山静かなり

風来渭水寒　風　来たりて　渭水寒し

凌波凝結一团団　凌はげしき波は凝結して一団団

万里晴空清爽　万里　晴れた空は清爽

此時観　此の時に観る

雄劍鳴匣　雄劍鳴りて匣はこを開き

人頭落玉盤　人頭は玉盤に落つ

一輪明月上欄杆　一輪の明月欄杆のぼに上り

了了りょうりょう了斯しよ心意こ　了了りて斯の心意に従え

始閑安　始めて閑安たり

華陰純陽洞での詩に因み、やはり閑中で作成されたと思われる詞を二首、つけ加えておきたい。この詞は、おそらく長安近辺で作成されたものである。「南山」は終南山のこと。前半は、よく晴れた冬の日のことであり、修養の厳しさと爽かさを示したものであろうか。後半の「雄劍云々」は、いわゆる「匣劍帷燈」のことで、匣に入っているも、名劍の力は匣の外に表われないわけにはいかない、すなわち、身中の真氣の力は働かないわけにはいかない、と

いうことを言ったものであろう。そのとき、俗心はすべて断ち切られるのであり、「人頭」が「玉盤」に落ちるとは、そのことを喻えたものであろう。かくして、「明月云々」は修行の成就した情況を表わしている。それを体得してそのままに生きれば、始めて「閑安」の境地に立てるので、と長真は言っているのである。

⑩ 「滅字木蘭花」第五首、卷下三b

水雲皮袋

水雲の皮袋

似水如雲長自在

水に似たり雲の如し 自在を長ず

自在閑人

自在の閑人

閑裏搜尋物外身

閑裏に物外の身を搜ね尋す

任行任住

行に任せ住に任す

色外真空閑裏做

色外の真空 閑裏に做す

欲覓真空

真空を覓めんと欲して

祇在南山尽静中

祇だ南山の 尽く静かなる中に在り

これも長安近辺での作であろう。「水雲皮袋」とは、定所のないこの身という意味で、道士の拘われない情況を述べたものであろう。この詞は、全体として、そうした道士の心情を詠んでいる。

本節では、「暢道」と「頌」を中心に検討した。修練によって道が完成するありさまを述べている点は、一節、二節と同じである。その修練の前提として俗情を断つことも、くりかえし強調されることであるが、本節では、俗情を

断つて自在の境地に立つ道士の立場が多く詠まれてゐる点に特色がある。また、六年間を俗情の克服に、十年間を道士としての修養に費したことが看取できるのも本節でみた詩の特徴である。長真の詩詞は、重陽や丹陽のそれらと違って数が少ないが、それは十年を「黙然」として道の修養に過ごしたこともよるであろう。修養のありさま、すなわち体内の「氣」の調和、運行については、むろん一節、二節でみたものと変わりはない。

本章で検討したものは、ほとんど詩であり、『水雲集』巻中・巻下に収録される詞は、特にまとめて取りあげることはしなかつた。それは、作成された情況が詩ほどはつきりしていないことと、一般的に言つて、詞は詩よりもさらに感性的であるからである。しかし、本章で取りあげた詩を検討する過程で、詞中の関連する語句に併せて触れたので、詞についても、おおよその内容は、事実上、検討したことになる。むろん、詩と詞の間に思想上の違いがあるはずはない。すなわち、長真の思想は、ほぼ本章で触れた範囲に納まる。

また、特定個人に贈った詩詞については、検討を省略した。じつは、それらも内容上は本章で検討したものと基本的に違つたところはないのであるが、多少は贈与した相手の情況に左右されるところもあるからである。

小 結

本稿は、譚長真の生涯と思想について、概略を考察したものである。ただし、精密な考察を行おうとしても、資料上の制約から、なかなかむずかしい。

譚長真、俗名は玉、字は伯玉、道名は允端、道字は通正、号は長真子は、寧海の中流階級の出身であり、その詩詞をみても、いちおうの読書人であったことがわかる。出家以前の生活については、ほとんどわからない。入道の契機は、風疾に罹ったときに、王重陽が山東教化に來たことによる。風疾に罹ってから、長真は、まず医薬に頼り、その効果がないことによって、生平を反省して北斗信仰に傾き、最後に重陽に弟子入りした。

長真は、重陽のもとで暮らすようになってから、疾病が軽減し、つれ戻しに來た妻を離別して入道した。後年の詩によって考えると、入道してから六年間ほどは、「俗情」を克服することに苦心したらしい。その辺の事情が、重陽から、丹陽の「得道」と違って「知道」と評された理由の一つであろう。

本稿では、重陽とその弟子たちの煙霞洞での生活、寧海あたりで「紙旗」を背負っての乞食など、彼らの日常生活の一面にやや触れることができた。これらのことについては、重陽や丹陽の詩詞をさらに検討することによって、より明瞭なものになると思われる。

重陽の死後、長真らは、一時期丹陽を二代目の「師父」に推そうという動きをしたらしい。この称謂は丹陽に拒絶されたと思われる。しかし「主教」の制度はあつたらしく、丹陽の死後、長真はその地位を継ぐよう求められた。長真の死後は、長生がそれを継いだらしい。

重陽のための服喪期間が終わってから、長真は、洛陽から東北方面にゆき、山東の西端、高唐のあたりまで布教した。山東に帰る意図はなかったらしいから、丹陽と布教地域を分担したようにも思われるし、また「俗情」には郷里への愛着も含まれるから、そうした「俗情」を克服した道士として山東には帰還しなかったのかもしれない。おそらく、さまざまな理由があつたのであろう。丹陽が、出家後も、不本意ながら郷里の家と連絡があつたのに対して、

長真には、そうした気配はまったくくない。

長真の布教の実態は、あまりはつきりしていない。諸伝記資料の記述から考えると、目覚ましいものではないが、おそらくある程度の成果はあったと思われる。しかし、後世の全真教隆盛の歴史がなければ、長真の行跡などは、たやすく湮滅してしまふ類いのものであった。また、重陽のための服喪があげてからの一〇年の行脚生活は、いちめんて長真の道士としての修養期間であったようである。

長真の常套句の一つに「摧強挫鋭」がある。これをモットーにしたことと、出家以前の生活を回憶した詩詞とをもとに考えれば、あるいは長真の本来の性質には、力をたのみ、弁舌に頼るところがあったのかもしれない。長真が、伶俐で体格の立派な人物であったことは、諸伝記資料からわかる。だが、かりに長真が生来「強鋭」の人物であったとしても、長年にわたる修練によって、すっかり悟道の道士になっていたことも事実であろう。

長真の思想を、諸資料から体系として抽出することは困難である。それゆえ、いくつかの顕著なことがらを取り上げられるだけであるが、本稿で検討したかぎりでは、つぎのような点が認められた。ただし、これらの点は重陽とその弟子たちに共通のものであって、長真独特のものではないと思われる。

長真によれば、道士としての修養は、まず「俗縁」、「俗情」を絶つことから出発する。「俗縁」、「俗情」とは、家族への恩愛、郷里への愛着、名利への欲望などであり、さらに根本的に言えば自我意識である。俗世における自我意識とは、他人との対抗意識であり、そこに意識される自己の内実は貪嗔癡に代表される欲望や感情である。

長真は、まず、この「俗縁」、「俗情」を捨てよ、と説いた。在家の信徒にもおなじようなことを説いたと思われるが、その場合は、心意を清静にするという「洗心」の方に重点が置かれたことであろう。「俗縁」、「俗情」を絶って

道士として生活する場合、それは雲のごとく水のごとく、定所を持たぬものである。心情的に雲水であるだけのこともあるうし、実際にも雲水行脚の生活を送ることもあろう。本稿では、雲水行脚の生活について、ごく表面的なことながら少しく触れることができた。

雲水の生活を送ることによって、俗世と無縁の「閑」の境地に立つ。その際、もつとも肝要なことは、心意を清静にし、虚無の境地に達することである、と長真は言う。虚無とは、なにもないという意味ではなく、「俗縁」、「俗情」とらわれない、ということであらう。その境地を長真は無為とも言っているが、これも俗世的な意味での行動はしないということであり、道士としての修養は全力で継続していくのである。

道士としての修養は、体内の「氣」の運行と調和にある。そのことについて、長真は、道士に特有な用語を使ってさまざまに説明している。もっとも重要なことは、「心腎」の「氣」の「交媾」であるらしい。そうして養われる丹田の精気を、「本源」や「靈源」、「一点靈光」など、さまざまな語で表現している。長真によれば、これこそ真の「造化」作用なのであり、彼は、体内の「氣」の運行と天地自然の活動を本質的におなじことと見做していたと思われる。

こうした修養は、関心がすべて自己一身の「氣」にむけられるので、主観のさまざまな活動、すなわち「心」も、客観世界における摂理、すなわち「法」も、ともに無関係である、と長真は考えた。「心法俱忘」とは、仏教に由来する思想であらうが、長真はそれを体内の養気という一点にかけて理解したのである。

長真の用語には仏教語が多いが、これは重陽直伝の三教同根の思想にもとづくことでもあろう。だが、重陽以前に、すでに道教は、仏教との長い対立と融合の時代を経過しており、相当量の道教経典自体が仏教経典を摂取するかたち

で成立していた。それゆえ、重陽の三教同根思想は、なにも特殊なものではない。(ただし、儒教との関係については、今は触れない。)長真もまたその重陽の教化を蒙り、かつ、すでに常識化していた道仏混淆の風土にのって、自己の所信を述べたにすぎない。

ただ、仏教思想の理解の仕方には、道士特有の偏向があった。そのことは、細かく分析すれば一つ一つの仏教語について指摘できることであろうが、本稿では特に「人我観」について検討した。すなわち、長真においては、「人我観」とは自我の実体観を打破する見方ではなく、人と我との対立を解消させる思想、つまり、これもいわば「俗情」の克服に関わるものであったと思われる。いかに仏教用語を頻用したとしても、長真は要するに徹底して道士であった。

ただ、三教合一の立場に立ち、分別を斥け、口弁を排し、もっぱら「默默昏昏」と体内の養気に専念する長真について、その思想なるものを明晰なかたちで描けないのは、ある意味では当然である。むしろ、長真にあっては、いろいろな思想を混沌化する要因を本来的に具えていた、と言った方がよいかもしれない。このことは長真の場合のみならず、重陽とその弟子たちに多少とも認められる傾向であり、しかも金丹道の用語を多用するのであるから、後世、全真教の教理がきわめて雑駁なものになったのも、やむをえぬことである。

本稿で検討した範囲内では、長真の思想として特に独自のものは見あたらない。しかし、長真は、重陽門下の四哲の一人として、重陽の訓陶をよく体得し、克己と養気の修練生活を送り、全真教初期の不安定な時期を悟道の道士としてその生涯を全うしたと言えるであろう。また、「真行真功」の教えにもみえるように、長真の視野の中には、当然のことながら他者の救済も含まれていたのであった。

1 拙稿にも、つぎの一篇がある。

「馬丹陽の出家をめぐる」、『秋月観映編』『道教と宗教文化』、一九八七年三月、平河出版社、所収。

「馬丹陽の布教活動をめぐって」、『東洋文化研究所紀要』第一〇四冊、一九八七年一月、所収。

2 『簡明中医辞典』、一九七九年三月、人民衛生出版社、「風痺」の項に、「痺証の一種。出《内経》痺論等編。指風寒濕邪侵襲肢節、經絡、其中又以風邪為甚的痺証。又名行痺、走注。一説風痺即痛風（見《張氏医通》卷六）、症見肢節疼痛、游走不定。治宜祛風為主、兼祛寒利濕、參以補血。……」とある。

3 『全真集』贈修行友：跳出陰陽造化関、一心向道莫廻還、淨清便是神仙路、只要閑中養内顔。

「陰陽造化」とは、莊子的解釈をすれば天地自然の働きであるが、ここでは、たとえば『養生内功秘訣』（道藏精華・第二集）に「造化」を説明して「男女合而為生子之機」とあるように、世俗世界における人間の営為を指すと思われる。

4 この理解の仕方が、重陽以下すべての直弟子たちに共通したものであったかどうかは、今後の問題としておきたい。

5 元・蕭元瑞撰『金丹大成集』、上海・医学書局・道藏精華百種、「金丹問答」。なお、拙稿「『重陽真人金闕玉鎖訣』について」、『東洋文化研究所紀要』第五八冊、一九七二年三月、一四七ページ参照。

6 「某仙」という呼び方は、彼らの間でごく普通のものであった。その点で、注1所掲拙稿「馬丹陽の出家をめぐる」三九五ページの「陸仙」について誤解があったので訂正しておきたい。「陸仙」も当時の重陽の弟子の一人であろう。

7 このあたりの事情については注1、6で言及した拙稿参照。

8 この点についても、注1、6で言及した拙稿三九八ページに「後に南京（開封）に行ったときに、はじめて一緒に居住することを許したのである」としたのは不正確であり、訂正しておきたい。文登や寧海にいる間はともかく、登州以降では、弟子たちは当然一緒に起居したはずである。

9 『甘水仙源録』卷九・龔応卯撰「鄂東秦渡鎮重修志道觀碑」：事畢將帰、四宗師憩於秦渡鎮真武堂、茂樹之下彷徨、然猶有慕

師之戚。執手分袂、各述其所蘊之志、俱不負祖師之囑。長春隱於太公之磻溪、長生寓東周之灑水、長真居水南之朝元。惟丹陽反樂室於場、為今之終南重陽万寿宮也。自是全真之教漸興、師宗之德益著、於興定間、有景慕四真之事者、依真武堂、經營宮室、以奉香火。恩例賜額、為志道觀。

10 『歷世真仙体道通鑑』卷五〇「劉希岳」：劉希岳、字秀峰、漳州人也。少業儒、三以進士舉於鄉。宋太宗端拱中、乃去為道士、居京都老子觀中。六十四歲、始遇異人得道、因号朗然子。嘗自言、「辛勤未逾十年、人驚不老。歲月俄經一紀、自覺如新。」亦有詩云、「夾脊双闕至頂門、修行迥路此為根。」一日辞去。其衆曰、「汝老矣。尚何之耶。」秀峰不答、沐浴更衣、室中陳席而臥。斯須其臥內有声、飛出一金蟬、遂失秀峰所在。嘗著詩三十余篇、行於世。

11 未詳。「頃有請長真齋者」とあるが、前後の文脈から見て、長真に齋を請う者有り、とは読みにくい。

12 府君廟を新郷所在としたのは『統編』であり、「仙跡碑」、「像伝」では獲嘉所在とされている。『統編』には、修武の張八哥の唱言につづいて、「後居新郷府君廟之庵、因往獲嘉、尋復寓衛州北閼邸中。新郷之廟官温六云々」とあるが、修武↓新郷↓獲嘉↓衛州（汲県）の順は不自然である。布教の順序から考えて、長真は修武↓獲嘉↓新郷↓衛州（それぞれの間は約二〇キロほど）と移動したはずであり、使者が比較的短時間で往復したということも考慮して、いま、『統編』の「後居新郷府君廟之庵」と「因往獲嘉」をを入れかえたりえ、『統編』に従った。なお、『年譜』には、大定一九年（一一七九）の項に「長真人、遊歴衛州、獲嘉府君廟居之」とある。長真は、このあたりを往復しているので、一一七九年に獲嘉に滞在した可能性はあるが、陽神の話の順序としては、『像伝』、『統編』に従った。

13 『統編』の「東遊抵陽武鼎北」という表現によれば、この陽武は開封府の陽武ではないかもしれない。そう考えた方が淇門鎮との位置関係は自然である。ただし、その場合、「鼎」は衍字だということになる。衛州にも滑州にも陽武鼎はない。

14 『金史』世宗本紀・中の大定二〇年の項には「十二月、己亥河決衛州」とある。ただ、中華書局の校点本の校勘記に、「本書卷三三、五行志、大定二十年「秋、河決衛州」、是年、八月辛巳朔、「己亥」為八月十九日。似志是」とあり、これに従うと長

眞の行動を無理なく説明できる。

15 はじめの贈詩に「王公吉善愛玄流」とあるので、王吉善なる人物か。

16 道士の方もこの要求に積極的に応じようとしたようである。『重陽立教十五論』第四は「論合藥」であり、執着してもいけないが、通じなくてはいけない、とある。

17 淇門鎮を出立したのは、この年の八月以前である。注13参照。

18 『遣山文集』卷三八「長真庵銘」。

19 『像伝』には「行香子」とあるが「南郷子」の誤りであろう。

20 注18所引「長真庵銘」参照。

21 『雲笈七籤』卷一一『上清黃庭内景經』『上清章』第一に「琴心三疊舞胎仙」とあり、その注に「琴、和也。三疊、三丹田、謂与諸宮重疊也。胎仙、即胎靈大神、亦曰胎真、居明堂中。所謂三老君、為黃庭之主、以其心和則神悅、故舞胎仙也」とある。

なお、注5所引拙稿一四四ページ参照。

22 注5所掲拙稿一〇四、六ページ参照。

23 同右一三四ページ参照。

24 丘長春『大丹直指』（藏二五冊）卷上に「周天火候」の説明がある。また、注3所引『養生内功秘訣』に「周天」を説明して「從丹田通脊而升到泥丸、從泥丸通胸腹而降到丹田、循環的路脈」とある。

25 応勅『風俗通義』正失第二「淮南王安神仙」に「鑄成黃白、白日升天」とあるように、古くからある神仙術の薬である。『抱朴子』「黃白」に「黃者、金也。白者、銀也」とあり、元来は外丹術であったが、ここでは内丹術として使っている。

26 『雲笈七籤』卷七二「大還丹契秘函」白金黃牙第二に「言白金黃牙者、非金・銀・銅・鉄・鉛・錫・水銀・朱砂・五金・八石・鉛之類、是乾坤媾精、太玄流液、感氣而成、且如人之有身、皆因父母傳氣而生、非肉所化。至藥亦然。坎男離女、情性

相依、結氣而成、白金黃牙、為天地之先」とある。

27 注5所掲拙稿九二、一二七ページ参照。

28 同右一二六～三ページ参照。

29 同右一五四～五ページ参照。

30 「三」と「六」については、同右五一～二ページ参照。

31 道蔵精華第三集之八、自由出版社、一九五八年一月、には「長真禪祖示門人語録」として『直仙直指語録』所収のものが収録されている。それには句点が打ってあるが、本稿はかならずしもそれに従っていない。

32 「示門人語録」：凡人輪廻生死不停、只為有心。得(德)山云、「心生則種々法生。心滅則種々法滅。」若一念不生、則脫生死。何為有心。蓋緣衆生有貪嗔癡三毒孽、無明心(心火)。師父云、「跳出三山口」是也。悟人所以(所以悟人)修行、割情拚愛、摧強挫銳、降伏除滅衆人不善心。要見本來(ナシ)父母未生時真性、本來面目、是也。何為不善心。一切境上起無明心。(ナシ)、慳貪嫉妬財色心、種々計較意念、生滅不停。被此孽(業)障旧來熟境、朦昧真源、不得解脫。要除滅尽、即見自性。如何名見自性。十二時中、念々清靜、不被一切虛幻(ナシ)旧愛境界朦昧真源、常処(ナシ)如虛空逍遙自在、自然神氣交熾沖和。修行如了此一事、更有何生死可怖、更有何罪孽(業)可懼。如稍生一念、不為清淨(靜)、即是罣碍、不名自在。如何到得。只要諸公一志如山、不動不搖、向前去。逢大魔、尽此一身永無廻顧、前期必了。晋真人去、「心清意淨(靜)天堂之(ナシ)路、心荒意乱(意乱心荒)地獄之(ナシ)門。」右の引用文のうち、()内は圈点を施した文字について『真仙直指語録』所収の書式を示している。ただし、異体字等については省略した。

33 未詳。徳山だとすれば徳山宣鑒のことかと思われるが、『伝燈録』卷一五、そのほかの關係資料に下のことは見あたらな
 34 『祖堂集』卷二「恵能和尚」の項に「故経云」としてこのことばを引くが、未詳。

35 『全真集』巻四・ハb(蘇幕遮)又勸化諸弟子に「兄弟癡、安脚手。擊破微塵、跳出三山口。月出東方日入西。焜耀明星、

三箇相隨走。氣伝清、神運秀。兩脈通和、真真真功就。衝上晴空光猛透。方顯無為、始見帰無漏」とある。長真の理解では、「三山口」とは「貪嗔癡」だということになる。

36 『真仙直指語録』所収の文に従った。

37 同右。

38 「父母未生時」については、注1、6で言及した拙稿注(4)参照。

39 『大丹直指』巻上・序に「臍内一寸三分所存元陽真氣、更不相親、迷忘本来面目、逐時耗散、以致病夭、憂愁思慮喜怒哀樂。但臍在人身之中、名曰中宮命府、混沌神室、黃庭、丹田、神氣穴、掃根竅、復命閔、鴻濛竅、百会穴、生門、太乙、神爐、本来面目、異名甚多」とある。要するに臍下丹田の元陽の真氣(先天の氣)が「本来面目」らしい。

40 注36に同じ。

41 『晋真人語録』(蔵三六冊)に「心清意静天堂之路、心荒意乱地獄之門」とある。晋真人は重陽や丹陽の詩文中にも引用されるが、未詳。

42 道藏精華第一集之三、自由出版社、一九六五年八月。

43 「酒色財氣」を断つことは全真教の特色の一つであるが、かならずしも重陽の創唱したものではない。『純陽真人渾成集』(蔵三七冊)巻上にもこれらを戒めた詩がある。

44 あるいは、「人非」は人間世界の「非」一般を指すのかもしれない。もしそうであれば、「已過」がすでに犯してしまった自分の罪過であるのに対して「人非」はこれから犯す可能性のある罪過ということになる。しかし、「已」と「人」との対応から考えて、どうもそのようには解しにくい。なお、「瑞鷓鴣」第一首(巻下b)にも「常搜己過心明頭、唯見他非性転迷」とある。

45 注5所掲拙稿一二三ページ注(12)参照。

46 『晋真人語録』：若要真功者、須是澄心定意、打疊精神、無動無作、真清真淨、抱元守一、存神固炁、乃真功也。若要真行、須要修行蘊德、濟貧拔苦、見人患難常懷拯救之心、或化誘善人入道修行所為之事、先人後己、与万物無私、乃真行也。先生曰、「若人修行養命、先須積行累功。有功無行、道果難成。功行兩全、是謂真人。」

右の語の主要部分は、『全真集』卷一〇・三a「玉花社疏」にも引用されている。

47 注5所掲拙稿一一七と八ページ参照。

48 同右一二六ページ以下参照。

49 注24参照。

50 注1、6で言及した拙稿三九六ページ参照。

51 また、注5所掲拙稿一二五ページ参照。

52 同右一一〇～一二三ページ参照。

53 『唐詩選』卷七・王之渙「九日送別」に「今日暫同芳菊酒、明朝応作斷蓬飛」とある。

補注1 『統編』劉処玄伝によれば、丹陽が没したとき、長生と玉陽は葬事を主管し、百日間墓守りをした。それから長生は、門人の張順真らに手紙を持たせて洛陽に行かせ、長真に「主教」を請うた。ある日、長真は、順真に「教門の事は、わたしの手にはない。丹陽は遊仙を得、わたしは朝元を得た」と言った。のち、長生に手紙を与えたが、「帰逝」のことと、教事を委ねることが書かれていた、とある。これによれば、「主教」は、丹陽↓長真↓長生と伝えられたことになる。

補注2 前注参照。